

---

my love your heart

芹澤藍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

my love your heart

### 【Nコード】

N7072R

### 【作者名】

芹澤藍

### 【あらすじ】

水川藍（27）は新聞社に勤める記者でバリバリのキャリアウーマン。性格も男より男らしい姉御肌で女子からの人気は高い。仕事に夢中になりろくに彼氏がいたこともない。周りは結婚の話で盛り上がる年齢だが、もう恋愛することを諦めている。そんなある日、新聞の新しい連載の担当になり大学講師の宗方真一（38）のもとを訪れ……。

仕事は出来ても自分の恋は上手く処理出来ない彼女と紳士的で容姿もいいのに中身は真逆な年上の彼との話。

## 水川藍の生き方

「水川！原稿出来たか？」

「あと2分でやります！」

.....

「できました！！！」

「お疲れ。無理言つて悪かったな。」「デスクはいつも無理言つじやないですか。なれっこですよ。」

「そうだな。休んでいいと言いたいとこだが次の仕事だ。」

「え？」

あたしのデスクに置かれた書類。

「なんですかこれ？」

「新しいコラムの連載だよ。その担当お前に決まったからその人に挨拶してこい。」

資料をめくつて読んでいく。

「帝都大学の講師ですか？」

「そうだ。工学部の講師だよ。今日の11時に大学に行くつて言つてあるから。」

「分かりました。一度帰つてから直接行きます。夕方くらいには社に戻ります。」

ジャケットと靴を取つてロッカーへ向かう。

「お疲れ。気を付けてな。」

「お疲れさまでした。」

時計を見るともう朝の4時。3月だからまだ外は暗い。

タクシーで帰つても家に着くのは5時くらいで、すぐ寝て8時に起きて風呂入つて化粧してパソコンで彼のことを少し調べないとか・

・  
ロッカーから残りの荷物を取りだし、ロッカールームを出ようとした。  
まだ残っている社員は結構いる。あたしも今日はまだ早い方だ。  
仕事柄不規則な生活には慣れた。

これが大手新聞社の女記者・水川藍（27）の生活である。

## 出会い

家で3時間くらい仮眠を取って支度をしながら彼のことを調べると彼は東大卒専攻分野は環境科学らしい。新連載はこれからの世界の環境を守るためには？というのがテーマである。

帝都大学には待ち合わせ時間の20分前に着き、自分たちの格好をチエックする。

化粧は薄めでスーツも黒のエレガントなタイプ。

ネットに写真がなかったので顔は分からないが、初対面が一番大事である。上手く付き合えるようにいい印象を残さねば。

指定された工学部の研究室へ向かう。

建物は古いが趣があって好き。

ドアをノックする。

「すみません。帝京新聞社の者ですが宗方真一先生はいらっしゃいますでしょうか？」

ドアが開き

「わたしが。」

目の前を見上げると大きな人影。

「あ、宗方先生でいらっしゃいますか？」

「ああ。中に入って下さい。」

研究室の中に入れてもらうと中は広いのに物で溢れている。

あたしが大学生の頃教授の部屋に出入りしてた時もこんな感じだったな、とか思い出した。

「狭いんですがこちらにでもお座り下さい。」

「ありがとうございます。」

誘導されたソファーに座りお茶を頂く。

「まずわたたくしは帝京新聞本社の社会部記者、水川藍です。これから先生の担当をさせていただきます。」

「よろしくお願いいたします。」

名刺を差し出す。

「私はいにく名刺がないんですが宗方真一です。お若いんですね。」  
あたしの名刺を見ながら先生が言った。

そうでしょうね！

不規則な生活のせいで肌はボロボロで艶なんてないもの！

「ですが精一杯頑張らせていただきます。」

先生はドアのところでも思ったが身長は180cmはありそう。銀のフレームの眼鏡で最初よく分からなかったが綺麗な顔をしている。38歳と資料に書いてあったが、服のセンスもいいし、学生には人気そうである。

「契約では毎週金曜日の夕刊に先生のコラムを載せる予定です。連載が始まるのは1カ月後からですが、レイアウトとかを今日は考えたいと思ひまして。お時間ありますか？」

「はい。大丈夫です。」

「では・・・」

それから1時間後。

あたしは大学の外に出た。

今までコラムの連載を担当したことはあったが、初めての打ち合わせが1時間で終わったのは今回が初めてである。

なぜなら宗方先生は殆ど喋らなかつたから。

あたしが『先生はどうですか?』と、相談しても『ああ・・・。任せます。』と何を聞いてもこんな返しなのである。他にもいくら初対面と言えど少しは雑談くらいするのにあたしがいくら話しかけても反応はほぼない。

しょうがないからあたしが全部提案したことを採用することに。

家を出る前に調べた時に以前雑誌で連載コーナーを持っていたことが書いてあつたから初めてのことに戸惑っているようには思えない。

あたしの見た目に不満だつたとか?

振る舞いに問題はなかつたはず・・・。

前途多難だ!!!

## 波乱

本社に帰ってデスクに打合せで決まった内容をまとめて提出してからもずっとあの先生のことを考えていた。

・・・普通連載が決まったら嬉しくないはずなのに。世間に名前が売れるんだから。しかも一度は受けた仕事なんだからいくらなんでも社会人である以上ちゃんと仕事はするはず。あたしより11こも年上なんだから。

理由はなんなんだろう？

「藍さん」

「は、はい!？」

考え事をしている最中に呼ばれてちょっとビックリしてしまった。

「この前話してた首相の裏金疑惑の件ですけど・・・。藍さんどうしたんですか？」

横から話しかけてきたのは時岡誠司。あたしより3つ年下の同じ社会后輩。

「・・・別に何も無いわよ。それより裏金がどうしたの？なんか見つけたの？」

「あの横山首相の後援会の名簿見てたらちょっと変なところに気づいて。見てもらえますか？」

時岡から資料の束を受け取って机の上に広げる。

「この名前の企業調べたんですけど、いくら調べてもこんな名前の会社ないんです。中小企業が首相にこんな額の献金ありえなくないですか？全部リストに載ってる会社って大手企業ばかりですし。」

時岡の話聞きながら資料全部に目を通す。

「・・・時岡。この会社の住所は？」

「え？まだ調べてないですけど・・・。」

「そこが甘いんだよ！ちゃんと全部下調べしてからやるんだよ！」

あたしは時岡に怒鳴りながら自分のパソコンでしらべる。

「すみません！」

時岡はあたしの横に立ったまま謝っているが今のあたしにそんなことは関係ない。

10分後、ようやくその会社の住所をみつけた。

「さすがに首相もこの会社が気づかれないようにネットも用心してやってるね。見つけるの結構大変だったわ。あたしこれからこの住所のここに行くから時岡は今までの首相の後援会リスト全部探してあたしのパソコンに送って！」

「は、はい！」

あたしは時岡に指示をして急いで外出の準備をする。

「デスク！この前の首相裏金疑惑の足掴めそうなんでちょっと外行つてきます！」

「あーはいはい。水川無茶しないでね。」

デスクは呑気に他社の新聞に目を通してている。

やばい！久しぶりに大スクープの匂いがする！！！！  
これ逃したらまずい！！！！

あたしはひさびさのスクープの予感に興奮していた。

## スクープ！

あたしはネットで見つけた住所に行き、予想通り会社なんてなかった。

それから時岡から後援会リストをメールで受け取りチェックをして・  
・。

「出来ました！」

デスクのチェックを受けてる間は緊張する。

「まあ客観的に事実を書けてるしいいか」

「ありがとうございます！」

それから後輩に印刷所に送ってもらいあたしも帰る準備をする。今日も寝るのは5時まわるだろうな・・・。

社会部の殆どの人も帰って行く。帰り際に「おつかれ！」と声を掛けてくれる上司もいた。でもこの新聞社という世界で、まだ27歳の小娘が一面を飾る記事を書くなんてたいの人は反発を抱くだろう。だけどデスクはあたしを認めてくれてこの記事を任せてもらえた。あたしのことを理解してくれる人だっただくさんいる。

「時岡！ありがとうございます！」

「そんなことないです！いい勉強させてもらいました！」

今日もあたしに怒鳴られまくったのにめげない時岡。仕事になればあたしも人格が変わるからな。

「藍さんかつこよかったですよ！上司にあんだけ面と向かっていえるの藍さんだけです！あの人たち藍さんが仕事する方が早いし正確

だから文句言えないですよね！」

あたしと時岡の話に加わってきたのは1つ下の後輩、塚本美羽。もうあたしを嫌い、さっきまでバトルしてた上司はいないから大声で文句を言えるけど。

「美羽ちゃん、そんなことないわよ。ただあたしは事実を言っただけだもん。」

「藍さんほんとかっこいいですー！同じ女子として憧れです！」

「ありがとう。あたしも疲れたから帰るわ。2人も最後の戸締りお願いね。」

「はい！お疲れさまでした！」

2人に見送られ午前4時17分、退社した。

この時のあたしの頭にはスクープをキャッチできた達成感しかなかった。

偶然！？

帰ってから死んだように寝て夕方になってやっと目が覚める。

流石にデスクが今日1日オフをくれた。

テレビを点けると夕方のニュースでは首相の裏金問題でいっぱいだ。夜には首相が記者会見をするらしい。うちの部から誰が行くんだろう。オフのあたしにはもう関係ない。

一応化粧は落として寝たが帰ってきた格好のままで、服はしわくちゃだった。

風呂場に向かってシャワーのコックをひねる。ぼーっとしたままシャワーを浴び、体を拭きながらふと思う。

毎日こんな生活を繰り返し、オフは殆ど家で寝る。会社は縦社会の男尊女卑であたしなんか男たちから嫌われる代表例みたなもんだし、あたしも仕事はすきだけど、会社の男は嫌いな人の方が多い。休みは外に行かないし、帰りは朝か呑んで帰ってくる。だから彼氏なんてもんには縁もないし、夢中で生きてきたからそんな余裕もなかった。第一、あたしみたいな男らしくて、見た目も良くないし、スタイルがよくもない女として駄目な人間と付き合ってくれる人なんているんだろうか。学生の頃は片思いくらいはしたこともある。でも告白するなんて勇氣もなかったし、されるなんてこともまずなかった。この歳で処女なんて面倒だろうしね。このまま仕事に一生を賭けて一人で生きてくのも悪いなんて思わない。世の中にはそんな女性もきつと結構いるだろうし。

悶々とこんなことを考えてもしようがないと頭から消し去り、部屋着に腕を通す。

夕飯作んなくちゃ！最近買い物してないから食材ないだろうな・・・  
。 買い物いくか。

この辺は都心からも離れていて程よく田舎っぽくて気に入って社会人なってからずっとここに住んでる。スーパーも駅も近いから便利だし。部屋着からジーンズとセーターを着て出かける。すっぴんだけど近所とはそんなお付き合ひもないし、見られても困らないからいいや。いつも買い物に行くときは殆どすっぴんで行く。あたしは3階立てのアパートの2階に住んでる。1階はちよつと危険な感じがして。階段を下りてスーパーへ一直線に歩く。

何日分が必要な食材を買い込みスーパーを出る。これでも食事は作るのも食べるのも好き。だからぶくぶく太っちゃうんだけどね。痩せたいなーとか考えてきれいな夕日を見つめてた。

「水川さん」

ん？空耳？

「水川さんですよね？」

どこから声がかかるのかきよきよろしてしまふ。この辺にあたしのことを知ってる人なんていないはずなのに。

「わあ！」

横に突然大きな影が出来て見上げるとそこにいたのは

「宗方先生！？なんで!？」

「この近くに住んでましてよく大学の帰りにこのスーパーに寄るんです。水川さんは・・・今日お休みなんですか？」

言われてハツとする。そうだ。今のあたしは一応服は着てるがあきらかに手抜きでしかもすっぴん。こんなの仕事関係の人に見られたくなかつた!!!

「あ、あの！そんなんです！あたしもこら辺に住んでまして！すいません！みつともない格好をお見せしてしまつて!!!」  
全力でなぜか謝つてしまふ。

「なんで謝るんですか？お休みなんですから別に関係ないですよ。」  
と突然先生は歩き出してしまふ。しかも歩いてる方向が一緒！

「はあ……。あ、あの」

「水川さんはおうちどちらなんですか？」

「えーとこっちです。」

「じゃあ私と同じですね。ご一緒してもいいですか？」

「は、はい」

なんだこの感じ！？この前はあたしから話しかけなきゃ絶対反応しなかったし、めっちゃ仏頂面で怖かったのに！今の宗方先生キャラ違いすぎない！？

「結構お買い物されたんですね。重そうだな。」

「あ、だ、駄目です！先生に持たせるなんて……。！」

「今は仕事じゃないし私が勝手にやってるんですから気にしないで下さい。」

あたしの持っていたスーパーの袋を軽々と奪ってしまふ。ちょっと今日は重かったから助かったけど、担当が先生に荷物を持たせるなんてやばい！

「む、宗方先生ですよね……。？」

「もちろんですよ。どうしたんですか？」

「いや、あの、なんでもないです……。！」

「お休みなんて記者さんならなかなかないんじゃないんですか？」

「あ、はい。でも週に1回は大体もらえますし。ただ仕事の日はとにかく働きますけど。」

「本当に大変なんですね。僕なんかの打合せの時間なんてもつたいたないですね。」

あれ？なんか誤解してらっしやる！？ご機嫌が悪くなったら担当としては困る！各先生のご機嫌を伺うのも担当の仕事なんだから！

「ち、違いますよ！先生とのそういうった時間も含めて仕事はとっても充実してるって意味です！」

「そうですか。良かった、ご迷惑じゃなくて。」

「こちらこそ先生の連載を社一同楽しみにしてるんです！お願いしますね！」



## 偶然！？2

朝。

急いで支度しながらご飯を流し込む。歯磨きをして走って駅まで向かう。

遅番じゃない時はいつも乗る電車に乗れないと遅刻になってしまう。なんとか満員電車に乗り、流れる汗を拭く。あたし本当に汗っかきなんだもん。

会社まで家からこれ一本で行けて30分で着くからやっぱりここは住みやすい。

電車の中で昨日のことを整理してみる。まさかうちの向かいの高級マンションにあたしの知り合いが住んでるなんて夢にも思わなかった。しかも担当の先生なんて。それにこの前初対面であんなに無愛想で気まずい空気だった宗方先生からあたしに話しかけてくるなんて……。どういう風の吹き回し？とにかくこれから家の周りに外出する時はちゃんとした格好しなきゃ！もうそれが面倒くさい。でもまた先生と遭遇した時困るのはあたしである。しょうがない。先生がスーパーで買い物するなんて想像つかない。あのマンションに住んでいるのはイメージ通りなだけ。あたしみたいにまだ半人前でお給料もたいしたことはないのじゃあんな高級マンション住めない。まさに貧富の差だ。あー。次会った時どうすればいいんだろう。ただどお互い大人としてそこは大丈夫だと思いたい。

会社のある駅に着いて電車から降りた時

「水川さん」

確かに声がした。この時間だとうちの社員も多く出社するので最寄り駅のここで会社の人間に会うことは結構ある。

「おはようございま……」

「また会いましたね。おはようございます。」

会社の人間なんかじゃない。宗方先生だ。

「電車乗る時ホームで見かけたんですが、混んでいて話しかけられなかったの。ここ本社の駅ですよね？」

「ええ……。せ、先生はなぜこちらに？」

「大学に行くのにこの駅で乗り換えしてるんです。本当に偶然ですごくいですね。」

先生は笑顔であたしに話しかけてくるけど、あたしの頭の中はまた混乱始めた。こんな偶然って！なんでこんなにこの人に会うの！？しかも油断している時に。今までだって考え事している最中だったし、もしかしたら家の近くの駅で走ってたところも見られたかもしれない。

・・・恥ずかしすぎる。

「私こっちの私鉄に乗るので。」

「は、はい！お気をつけて下さい！」  
「ではまた」  
改札を出たところで先生とあたしは別れた。

会社まで歩いている間もあたしの頭はぐちゃぐちゃだった。

## 先生の情報

とうとう先生との打合せの日がやってきてしまった。

気まずいが仕事なんだからしょうがない。あたしは電車で会った翌日から電車の時間をずらしたり、早く帰れてもスーパ―は少し遠い違うところへ行っていたから彼には会わなくなった。まあ念のため化粧とそれなりの格好はしてるけど。

研究室についてドアの前で一度立ち止まる。深呼吸をしてノックをする。

「帝京新聞社の水川ですが宗方先生いらっしやいますか？」  
しーん。何も反応がない。

「あのつむなか・・・」  
ドンッ！

「痛っ！！！」  
いきなりドアがいきおいよく開いたので思いっきりあたしの顔面に当たったのだ。

「宗方先生ならまだ授業に出ています。中でお待ちください。」  
ドアから現れたのは一人の男だった。あたしよりもまだ若そうだから先生の生徒かな？

「はぁ・・・ありがとうございます。」  
中に招かれてこの前も座った来客用らしきソファーに座った。すぐに男はお茶を持ってきてくれた。ここは宗方先生専用の部屋だから他の講師は居ないが、どうやら今ここに居るのはこの男だけらしい。

「あなた先生の生徒さん？」  
「はい。手塚といいます。院生で先生の助手的なこともしてます。」  
お茶を置いて立ち去ろうとする手塚君を呼び止める。

「あのさ！宗方先生ってどんな先生なの？」

いきなりあたしが話しかけてきてびっくりしたようだ。

「どんなって・・・まずあの容姿なので女子から人気ですし、生徒の面倒見もいいので男子生徒からも人気ですよ。」

「じゃあ普段っていうか授業外とかはどう？」

「呑みに連れてつてくれたりしますけど勿論優しいですし相談も親身につてくれて同性の俺もかつこいい大人だと思いますよ。」

「ふーん。かつこよくて優しくて人気な講師。非の打ち所がないんじゃないか？じゃあなんで初対面はあんなに冷たかったのか更に謎めいてくるな。」

「あのもしかして先生のこと狙ってらっしゃるんですか？」

「は？違うわよ！あたしはあくまで先生と仕事の上でどんな方が把握したかったのよ。」

「なんだ。先生に不毛な恋でもしてられるのかと思ひまして。先生にはきれいな彼女さんがおられるので。」

「なんだこいつ。言葉遣いは問題ないけど、あたしに色々失礼じゃないか？」

「あのねあたしは・・・」

「水川さんお待たせしました。」

あたしが言いかけたときにドアが開いた。宗方先生が帰ってきたのだ。あたしはその場に立ち上がって先生の方を向く。

「宗方先生！全然待つてないですよ。」

「すいませんでした。手塚、これから彼女と打合せするからもう帰つていいよ。」

「分かりました。」

先生に言われるとすぐに手塚という生徒は出て行った。先生ナイスタイミング！

「記事一応書いてみたんですがこれです。」

先生は紙を渡してきてあたしは受け取り、一度読んでから鞆から何回か読み直す。

「先生、あの内容はとてもいいと思うんですが新聞って専門雑誌と

かと違って主に一般の方が読まれるのでちょっと表現を変えるだけでみなさん分かりやすくなるんですね。」

年下でこんなひよっこ記者のあたしに言われて怒っていないかちらちら先生の顔を見る。

「そうですよ。一般の方じゃ専門用語並べたって分かりにくいでしょうね。」

笑って答えてくれるのでどうやら怒ってはいないようだ。あたしは鞆から赤ペンを出して気になった箇所にくつつかラインを引く。

「じゃあこのことをちよつとこんな風に直すとかどうですか？」  
納得してくれているようだ。

「すみません。全然わかんない奴がこんなこと言ってしまった。」  
「いいんですよ。私には新聞のことは分からないし、逆にいい意見をもらえて勉強になりました。」

相変わらず笑顔で対応してくれる。どんだけ優しいんだこの人。本当に初対面のあの人と同一人物なんだろうか。

「では明後日までをお願いしてもよろしいですか？」

「あー・・・明後日は外で仕事なので大学には来ないですよ。」

「え！ならFAXかメールで大丈夫ですよ。」

「でもちようど本社の近くで仕事なので帰りに寄りますよ。水川さんいつまで会社にいますか？」

「そ、それはだめです！あたしは遅くまでいるとおもいますが、そんなこと先生にさせるなんて駄目です！」

「いいんですよ、私が勝手にやるだけですから。」

「でもFAXとかの方が先生に負担もかからないですよ！本当にだめですよ！」

しばらく戦ったが、結局先生が勝ってしまった。

「本当にすみません・・・。」

「気にしないでください。着くときに水川さんにメールしますから。」

「前回先生にあたしの仕事用パソコンのアドレスを覚えておいた。そ

んなに気を使ってもらうなんて・・・。

「ところで最近電車でも家の近くでもお見かけしませんね。」  
「ぎくっ。だって電車もスーパーも変えてますもん。」

「そうですね。偶然でしょうね。」

「休日の水川さんにお会いしたときは驚きましたよ。」

「そりゃそうですね。だってすっぴんにあの格好だもん。ただでさえきれいじゃないあたしがもっと醜くみえたでしょね。」

「本当にお見苦しい姿を見せてしまつてすみませんでした。わすれて・・・。」

「違いますよ。工作中的の水川さんは男の私から見てもかっこいいとおもいますが、休日のリラックスした水川さんは可愛いなおもつたんです。」

「へ？可愛い？幻聴かと耳を疑った。そうか、こんなモテそうな人は死ぬ程こういう言葉を女性に言ってきたからただの社交辞令に過ぎないんだろう。落ち着け自分、ただのお世辞なんだ。」

「ありがとうございます。では明後日お願いします。」

ソファから立ち上がるうとした時

「この前の首相の記事読みましたよ。水川さん凄いですね。」

「読んでくださつたんですか？そんなことないです。」

「仕事本当に頑張つてらっしゃるって分かりますよ。」

「ただ必死だけです。では失礼します。」

先生は研究室の外まで送ってくれた。正門まで送ると言ってくれたが流石に申し訳ない。

一人になって先生のことを改めて考えてみる。褒めるのが上手で優しくておまけにかっこいい。おもわず久しぶりにドキドキしちゃいそつだつたが、それが仕事だと分かれば話は別。目の保養にはいいかもだけど。あたしに恋なんて無縁のものなんだから。

## 逆襲

2日後。

あたしは会社でパソコンに向かって仕事をしていた。

この前みたいなスクープじゃないけど、記事を書いている。今日はこれを書いたら仕事は終わりだ。あとは先生が来てくれたら・・・。全部書きあがってお手洗いに行こうと席を立ち上がり廊下に出ようとしたら

「水川。ちよつと来い。」

呼ばれた。しかも上司だ。それもあたしのことを嫌っている上司。

「はい。」

その上司について行くと小さい会議室に入れられる。入ってみればあたしを連れてきた上司以外にも数人いる。みんなあたしを気に食わない男の上司でこの前首相のスクープの件であたしに記事を書かせることを反対した人たちだ。この前はデスクがいたから終わってから何もなかったけど、今日はデスクは外に行っている。

「なんででしょうか。」

「なんででしょうか、じゃねえよ。分かってんだろ。この前の首相の記事のことだよ。」

「それならもう終わったことじゃないですか。」

「お前は終わっても俺たちはまだ納得してないんだよ。」

「そういわれても最終的にはデスクが決められたことです。あたしは関係ないです。」

「そんなこと言ってお前デスクにやたら気に入られてるよな？デスクになんかしてんじゃねえのか？」

「何かってなにも・・・。」

「例えば寝てるとか」

馬鹿か。いつの時代の話もこの人たちはしてるんだ。第一デスクはみんなに公平でここにいる上司たちとは違う。

「まさか。もしあたしなんかと寝てるならデスクはかなり趣味が悪  
いってことですね。」

呆れて笑ってしまったら更にそれが彼らをおこらせてしまったら  
しい。

「てめえ！そのなめた態度どうにかしろよ！」

「なめてなんていません。ただ必死で仕事をこなしてるだけです。

私早く仕事を終わらせて帰りたいので失礼してもいいですか？みな  
さんも早く仕事に戻られたほうがいいんじゃないんですか？」

その瞬間ものすごい音がした。上司の一人が壁を思いっきり殴った  
のだ。しかもあたしの顔の横の壁を。

「もう我慢できねえ！てめえ！！！！！」

上司の一人の手が見えた。その瞬間幼い頃の記憶が蘇ってきた。あ  
たしの父親は母とあたしに暴力ばかりふっていた。母は怯えながら  
もあたしを必死で守ってくれていた。あたしが高校生になる時やっ  
と離婚できたが、小さいとき一番身近な父親という男から暴力を受  
けていた記憶は今でもあたしの中に鮮明に残っている。多分そのせ  
いもあって暴力をふるったり感情的になる男がすごく苦手だ。どう  
して今思い出してしまっただろう。急に体が言うことを聞かなくな  
った。

「藍さんお客さまが・・・きゃあ！！！」

扉の方から声がしたようだ。恐る恐る目を開けると上司達はみんな  
動きを止めて扉の方を見ていた。

「何してるんですか！？藍さんから離れてください！人呼びますよ  
！」

誰かがあたしの前に走って現れた。

「・・・つくづく運のいい奴だな。くそっ！」

上司たちはいそいそと全員会議室から出て行った。

「藍さん大丈夫ですか！？怪我してませんか！？」

「美羽ちゃんか・・・。大丈夫よ。ありがとう、助かったわ。」

あたしがなぐられそうになった瞬間たまたま扉を開けて入ってきたのは美羽ちゃんだったのだ。彼女も普段はおっとりした可愛い子なのに意外とやるんだな。

「あの人たち本当に卑怯ですね！デスクが居ない日を狙ってくるなんて・・・！」

「いいのよ別に。もう慣れたから。」

かろうじて立っていたが歩こうと一歩だした途端あたしはバランスを崩してしゃがんでしまった。

「藍さん！大丈夫なんかないじゃないですか！」

「今までもうこういうことはあったけど、殴られそうになったのは初めてだわ・・・。ごめん、すぐ切り替えるから。あんたなんでここに来たの？」

「あ！あの1階の受付に宗方真一って方がお見えになったみたいで・・・。でも藍さんの代わりにあたしが」

「いいよ。行ける。ちよつと待って。」

深呼吸して自分の顔を両手で思いつきり叩く。立ち上がり

「よし。もう本当に大丈夫よ。」

美羽ちゃんは心配そうにあたしの顔を覗きこんでくる。

「なんであんたが泣きそうな顔してんのよ。」

「だって藍さんこんなのずっと続いてたらそのうち死んじゃいますよー！」

ポロポロと美羽ちゃんが泣き出してしまった。

「もう、あたしは大丈夫よ。タフなんだもん。ほら、これで拭きな。」

あたしのハンカチを受け取り涙を拭かせる。

「うえーん！あたし藍さんのことほんとにほんとに心配なんですー！」

「ありがとう。だけど心配いらないから。あたしは負けないもの。」  
美羽ちゃんを慰めながら言ってる言葉はまるで自分に言い聞かせているようだった。

ようやく彼女が泣き止み、席につかせてから急いで1階へ降りていった。

ロビーのソファアに座っている人を見つけて駆け寄る。

「先生！お待たせしてすいません！」

「いえ、そんなに待ってないですから気にしないでください。」

彼は本を持っていたので読んで時間を潰していたらしい。

「ごめんなさい！ちょっと仕事を立て込んで・・・。」

「大丈夫です・・・何かあったんですか？」

「え？何かって仕事のことでですか？あの、えっと、いんさつが」

「そうじゃなくて。何か辛いことでもあったんですか？」

一瞬動揺してしまった。さっき切り替えたつもりだったのにそんなに顔にでてるの？

「ないですよそんなの。私ちょっと疲れてるのかもしれないね。」

「本当に大丈夫ですか？もしかして今日は帰るの朝方とかなりそうなんですか？」

「大丈夫ですよ。今日はすぐに帰りますよ。」

「じゃあ私待ってますので一緒に帰りましょう。」

「それはご迷惑でしょうからいいですよ。本当疲れてるだけですから。ご心配おかけしました。では原稿お預かりしてもよろしいですか？」

「・・・分かりました。これです。」

この時先生の表情が少しだけ歪んだ気がしたけど気にしてる余裕なんてなかった。

「今日はわざわざありがとうございます。また来週の打合せはご連絡しますね。お気をつけて。」

お辞儀をして彼を出口まで見送る。

「はい・・・。ではお疲れ様でした。」

彼が夜の街へと消えていったのを確認して社会部のフロアに戻る。

エレベーターの中で原稿を抱えながら彼の言葉を思い出す。今あれ以上優しい言葉をかけられたらあたしは壊れるかもしれない。強い

自分が崩れる。ただ罵声を浴びるだけなら会社に入ってからだいが慣れたから耐えてきたけど今日殴られそうになった瞬間が父親と重なって頭の中を駆け巡る。彼は社交辞令で心配してくれたのに仕事相手が突然泣き出したらドン引きだろうし、これからやりにくいだろう。一度壊れたらきつと戻れない。だから精一杯意地でも強がってなきゃ。

エレベーターが開き社会部のフロアに入って自分の荷物を片付けて帰りの支度をした。鞆を持ち上げ会社を出た。このときもう時計の針は11時を指していた。

## 恐怖と安堵

電車の中で出来るだけさっきのことを忘れようとするが消えない。仕方ないので寝ようとするが今度は眠れない。いつもならすぐ寝るのに体は疲れてても睡魔がこない。

最寄の駅に着いて電車から降りてからも体も心も落ち着かない。もう1時半過ぎてる。会社の駅は混雑してたけど、ここはもうこの時間で人も少ない。駅から家まで歩き始めたがいつもは電灯がなく少し暗い夜道も平気なのに今日はすごく怖く感じた。歩くスピードが上がリ、気がついたら走りだしていた。家まであと半分くらいの距離まで来たとき何か音がした。後ろの方からバイクのエンジンの音がするのだ。周りを見渡したがここは住宅街で誰もいない。どんな音が近づいてくる。怖い。怖い。ただそう思った。なんとか再び歩き始めた時にはバイクの音はすぐそこまで来てたと思う。後ろを振り返らないようにしてたのに次の瞬間あたしの右肩に掛けてあった鞆が凄いい力で引っ張られた。あたしは反応すら出来ず、体の右側から思いつきり転んだ。

地面に体をぶつけてやっと頭を起こしてあたしはひったくりにあったらしいという事によく気づいた。もう体が動かない。心も体も。どうやって帰ればいいんだろう。鍵も財布も入っている。でも仕事の資料が入ってなくてよかった。こんな時まで仕事のことを考えてしまうなんてあたしはどうかしてるのかな。地面に倒れたまま色々考えていた。そのうち空を見上げて東京の空って意外ときれいなんだとかどうでもいいことも。

歩いてきた道の方から今度は靴の音がする。走ってるみたいだ。でももうそっちを見る力すらなかった。いきなり靴の音がやんだ。どうしたんだろう、と思うと空しか写ってなかったあたしの視界に人

がいる。

「水川さん……！」

「……むなかた、せんせえ？」

「そうです。すみません。無理を言っでもやっぱり貴方と一緒に帰るべきでした。本当にすまない……！」

「あたし……ばつく……どこにも、帰れない、んで……」

言葉を絞りだしていた途中で先生があたしを起こし、抱き締めた。

「もういいから！俺がいるから！」

きつく抱き締められ人の体温を感じたらもう涙が止まらなかった。

「ふっ……ごっつ、ごめんなさい……。」

「謝らなくていい！もう無理するな！泣いていいから！」

薄暗い夜道、先生の腕の中でただあたしは泣いていた。

## 目覚めとともに・・・

目を開けると眩しくて目をこする。自分の格好を見ると昨日会社に行った時と同じ服である。落ち着いて部屋を見渡せば自分の部屋なんかよりずっと広くてベッドも違う。

ようやく頭が動き出し、昨日のことを必死で思い出す。そうだ。昨日帰り道ぼーっとしてひったくりにあったんだ。それで体も痛くて動けないでいたら・・・宗方先生が来たんだ。その辺はもう記憶が曖昧で夢か現実かよく覚えていない。ここはどこなんだろう？とりあえずベッドから降りようとしたらドアが開いた。

「起きましたか。体調はどうですか？」

「宗方先生！あのこれは・・・」

「覚えてらっしゃらないですか。昨日帰り道に水川さんが倒れているところを見つけてまして、バックを盗られて家に帰れないといって寝てしまったのでうちにつれてきてしまいました。」

なんとということだ！そんな迷惑をかけていたなんて！謝ることが多すぎて何から謝ればいいのかもわからない。

「す、すいません！すぐに帰りますか・・・」

帰れるはずない。鍵がないんだから。

「すぐには帰れないでしょうね。とりあえず風呂に入ってきてはどうですか？下着とかはないですが私の服なら貸しますから。」

「え、でもそんな」

「もうここまでできたら開き直って私に甘えてください。さあ。」

とあたしにベッドから立ち上がるように手招きする。もうここまできたらしょうがないのか。

「じゃあ・・・」

立ち上がるうとしたのに右足の力が抜けて転びそうになった。でも先生が咄嗟に受け止めてくれた。

「ほ、ほんとにごめんなさい・・・。足首捻挫しちゃったみたいで

す……。」

「だからいいんですよ。じゃあごめんじゃなくてありがとうございますって言うてくれたほうが私は嬉しいですね。」

「きやつ」

突然体が宙を浮いてびっくりする。これは！俗に言うお姫様抱っこってやつだ！してもらったの人生で初めてだ！

「お、重いですから降ろしてください！」

「昨日もここまで運んできたんです。これぐらいの距離大丈夫です。それに重くないですよ。」

そんなこといわれると急に恥ずかしくなった。

「……ありがとうございます。」

あたしがそういつたらますます彼は笑顔ではにかんできた。

お風呂からだと脱衣所に着替えがあった。下着はまた同じの着なきやいけないけどそんなわがままは言ってられない。先生が置いてくれた服は長袖のＴシャツに半ズボンだった。どちらもサイズが大きくてあたしが服に包まれてる感じだった。不謹慎にも初めてきた男性ものの服が面白かった。

脱衣所を出てリビングの方へ右足を若干引きずりながら歩いていくと先生は料理を運んでいた。

「朝ごはん作ってくださいましたんですか？」

「おなかすいたかなと思ひまして。呼んでくれたら運んだのに。足大丈夫ですか？」

「はい。ちよつと歩き方変ですけど。」

席につくように言われ２人で向き合いながら朝ごはんを摂った。いくつもおかずを用意してくれてしかもかなりおいしい。やっぱりこ

の人はなんでもできるんだな。食器も全部片付けてくれて本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだったけど、「ありがとうございます」って言ったほうが先生が喜んでくれるらしいのでその言葉を言う。その後は右足の捻挫した足首に湿布と包帯を巻いてくれた。これも恥ずかしかつたけど、先生は有無を言わせないオーラに圧倒されて負けた。でもこれのおかげでだいぶ痛みはなくなり、普通にほぼ歩けるようになった。

「今日仕事あるんですか？」

「あ、今日はお休みなんです。先生は？」

「私もお休みなんです。じゃあ服がもうすぐ乾くはずですからそれから動きましようか。」

「いや、ここまでしてもらったのであとは自分で」

「車あつたほうが移動も楽でしょう。私今日は一日暇なのでどこでも付き合いますから。」

あたしもこの人に対抗できない気がする。優しいんだけど結構強引なのかも。嬉しい強引なだけどね。

「じゃあお願いします・・・。」

でもこの優しさを勘違いしてはいけない。あくまであたしは先生にとって仕事相手でご近所さん。それ以上でもそれ以下でもない。ただ先生がいい人で誰にでも優しいだけなんだから。

## 衝撃

あたしがお風呂に入ってる間に先生が服洗って乾燥機までかけてくれたので割とすぐに出掛けられた。昨日着てたのはシャツにカーデイガンでジーンズというラフな格好だった。昨日は外で仕事の予定がなかったから。だから彼は不思議その事を尋ねてきた。

「昨日は会社の外で仕事がなかったの。」

説明をしてからまずどこから行くか相談した。幸い財布にクレジットカード入ってなかったので良かった。でも家の鍵をどうするかが一番重要である。とりあえず近くのショッピングセンターに行くことにした。メイク道具ないのですっぴんだったが着いた時は開店したばかりでほまだ殆ど客がいなくて助かった。この辺りで知り合いなんて先生以外いないんだけど。最低限必要な下着と化粧品を買った。先生と一緒に選ぶとあたしが恥ずかしがるのを分かってショッピングセンターのロビーで待っててくれた。待たせてはいけないと猛スピードで選びトイレで着替えメイクを済ませた。

「お待たせしてすみません！」

先生は煙草を吸っていた。先生が煙草を吸うなんて知らなかった。いつ会っても煙草独特の匂いはしないし、むしろいい匂いだと思う。「いいえ。こっちこそ煙草臭くてすみません。」

すぐに煙草の火を消した。

「早かったですね。・・・服は買わなかったんですか？」

だって先生の家で洗濯してもらったから綺麗だしお金は先生が貸してくれたからもったいなくて。

「はい。洗濯して頂きましたし。」

借りたお金の残りとレシートを返すと先生はまじまじとレシートを確認している。そりやお釣りと返されたお金が一致するか気にするでしょうね。

「これだけしか買わなかったんですか？もっと必要でしょう。」

「いいえ。これで充分です。」  
「・・・じゃあいいでしょう。」  
と駐車場へと向かった。

その後は警察に行つて被害届を出して大家さんの家へ行つた。大家さんはうちのアパートから離れたところにすんでいるが・・・。  
大家さん家のインターホンを鳴らしても誰もでて来ない。どうしたんだろうと考えていたら隣の家のドアから人が出てきた。

「そのうちの人が昨日から海外旅行に行つちやっっていないわよ。」  
ええ！？じゃあスペアキー貰えないの！？あたしの横に立ってた先生が

「いつ頃お帰りなるかご存知ですか？」

「確か一週間って言つてたわね。」

がーん！あたしはその間どうすれば！会社に泊まるしかないのか。

「ありがとうございます。」

と先生に手を引かれ車へと戻つたが

「じゃあ帰りますか。」

え？どこに？

「あのどちらに？」

「私の家に決まっていますでしょう。」  
「そんなわけには！あ、あの会社に泊まりますので！」

会社ならシャワー室もあるし、美羽ちゃんからお金を借りよう。

「先生からお借りしたお金は必ず返しますから。本当に今日は」

「昨日会社で何かあつたんでしょ？それにいくら人がいたつてそんなところに一週間も寝泊まりするなんて女性なんだから体にも悪

いです。」

でも先生に迷惑かけず寝泊まりできるのは会社くらいなんだもん。

「別に何もありませんよ。一週間くらい泊まることくらいよくあります。」

「昨日会社で会った時も辛そうな顔してひったくりにあつた後は泣いてたじゃないですか。そんな弱ってる女性を一人でほつとけないです。」

「それは・・・でもあたしは弱ってないですし、普通に」

「あなたが心配なんですよ！」

車内に先生の声が響いた。

「なんで辛い時に辛いつて言わないんですか？甘えればいいでしょうっ？」

「し、心配して下さるのは嬉しいですが先生にこれ以上ご迷惑をかけるわけには」

「私がいつ迷惑だと言いました？私は・・・」

いきなり先生の言葉が詰まった。助手席から運転席の先生を覗きこむ。

「私はあなたが好きなんです。」

・・・え？え！？え！？この人があたしを好き？なんの冗談？

「冗談は」

「冗談なんて言うわけないでしょう。あなたが好きだから心配なんです。」そんなこと言われても人生で初告白がまさかこんなかつこよくて完璧な人なんてすぐに信じろってほうが難しいでしょ？

「あなたが私を仕事相手としか見ていないことは分かっています。だからうちで手をだしたりはしませんから私を使って下さい。」

あたしだって先生はかつこよくて優しい素晴らしい男性だと思う。きっと優しいのはみんなにしていることで自分だけが特別なんて思っちゃいけないって。

「だけど」

「まだ納得してくれませんか？私を利用すればいいんです。」

そうは言っても。

「あ！先生確か彼女さんがいらっしやるんですよね？私に同情してそんなことおっしゃてるんで」

「彼女はいません。私のことを好きになれなんて無理強いはしません。だからそんなこと言わないで下さい。」

急に先生が悲しそうな顔をするからあたしまで悲しくなってしまう。

「・・・じゃあお願いします。」

この人にここまでよくしてもらったのに悲しくさせるのは失礼だと思つて。

## ありがとう

大家さんの家から先生の家まで結構距離はあったが、先生は都心の方へ車を発進させた。

「先生、こつち家の方向じゃないですよね？」

「ちよつと寄りたいたところがありました。少し付き合っただけでもいいですか？」

「はい……。」

車内であたしたちは殆ど言葉を発さなかった。いつも年下のあたしに敬語で紳士的な先生が初めて感情的になつているところをみたけど、あんな顔するんだなつて驚いた。常に冷静そうなのにあたしが怒らせてしまったのか後悔をしてあたしから話かける勇氣もなかった。

「水川さん、着きましたよ。降りてください。」

「え？はい……。」

先生のことを考えていて急いでシートベルトをはずし降りる。ここは……

「ここブティックじゃないですか！」

車から降りた目の前には高級ブランドを扱うブティックがあったのだ。多分あたしの給料じゃ買えないであろうブランドばかりを扱う。啞然として突つ立つてるあたしの腕をとり、店内へと入る。こつちやつて男の人に腕を引つ張られるのは先生が初めてに近いけど、嫌な感じはしない。

「いらつしゃいませ宗方様。」

数名の店員さんにお迎えされる。先生の名前を知ってるってことはよく先生はここを利用するってことか。いつもいいスーツきてますもんね。

「今日は私じゃなくて彼女に見合う服を用意して欲しいんだが。」

「かしこまりました。」

え？先生が何かお買い上げするんじゃないんですか！？

「ちょ、どうということですか先生？」

先生に尋ねている途中で女性店員数人に連れていかれてしまったあたり。何着も服を着せられその度先生がチエツクをして選んで。店員が見繕ったもののうちから先生がいいといったものが次々持っていられる。試着室から出た頃には先生が支払いを済ませてしまった後みたいで店員さんが大量の袋を持っていた。

「私こんなにお金返せないです！」

金額はどれも書いてなかったが確実に云十万はする。少ない給料でもたまに呑みにいく程度だから貯蓄はそれなりがあるが、これを全部支払ったら確実に全部消える。

「私を買っんです。あなたに請求するなんて馬鹿なことはいけませんよ。これから一週間仕事に行くにも服や鞆がなかったら困るでしょう？？」

「だけど、何もこんなになっても！それにもっと安いのでいいの……。」

何も出来ない自分が申し訳なくて先生の顔を見れない。また先生に引かれ車の中に戻る。買上げた荷物はトランクに店員が詰めてくれ、出発した。

しばらく沈黙が続いたが耐え切れなくなって先生に話しかけた。

「あの……ありがとうございます。」

「そうです。謝るんじゃなくて感謝されるほうがずっと嬉しいんです。あれは私が勝手にしたことだからあなたは気にしないでください。」

「新しい服なんて最近買いに行けてなかったの……。どれも可愛い服ばかりでしたし。嬉しかったです。」

先生はあたしが話しかけてからずっと微笑みかけてくるのが眩しくて面と向かって話せない。何度見てもこの人はかっこいいと思う。でもかっこいいと思うのと好きという気持ちは別だ。先生の家泊

まっつてから更に優しくされて正直ドキドキしてる。だけどこの人を好きになっても辛いことの方が多いだろうし、先生は好きと言ってくれたけどきつと仕事が大事なあたしが珍しいとか気まぐれに思えてしまう。そのくらいこの人はモテる感じがするし、見えないけど女性には不自由してなさそうだから。

「あとスーパーで買出しして行きましようか？」

「はい。」

さっきまでの車内とはうって変わって明るくて穏やかな空気で満ちていた。

先生とすっぴんで遭遇してしまったあのスーパーに買い物をしに行った。一緒にカートを引いて歩いていると恋人か何かと錯覚してしまいそう。会計が終わり袋を持ち上げようとしたらさっと先生が持つてしまった。

「私一人で持てるから大丈夫です。」

「ありがとうございます。」

車に乗車して先生の家と帰った。

先生の家に着いた時にはもう日も暮れて2人でキッチンに立ち夕食の準備をし始めた。準備してる最中にあたしのお腹がすごい大きな音をたてて鳴った。考えたら昼ご飯は忙しくて食べそびれていたのだ。

「す、すみません・・・お見苦しいところを・・・」  
「恥ずかしくて先生の方を向けない。」

「別に恥ずかしいことじゃないですよ。早く作り上げましょう。」  
「ここにこ笑ってくれるけど穴があったら入りたい。作り終わって料理をテーブルに並べてまた先生と向き合って食卓に座る。夕飯はクリームパスタとサラダで先生が作るのをあたしが手伝う感じだった。」  
「先生の味付けおいしいです。あたしも料理は好きなんですけどこれ作れるようになりたいです。」

本当に先生の味付けはおいしかった。どの料理でも得意そうだなあ。  
「ありがとうございます。私は水川さんの料理が食べたいですね。」  
「じ、じゃあお世話になる間はあたしが家事全部やってもいいですか？」

「嬉しいですけど全部一人でやるんじゃ大変でしょう？しかも水川さんは帰りも遅かったりしますが私は殆ど決まった時間に帰って来れます。あなたが出来ない部分を私が手伝うのはどうですか？」

確かにあたしは突然スクープとか入ったら帰ってこれない日もあるかもしれない。無理に全部受けるよりその方が先生にも迷惑かけないのかも・・・。

「それをお願いします。」  
「こんなにお世話になって何も出来ないのは嫌だ。だけど夕飯の片付けは2人でやったほうが早いです。」と先生に言われ結局手伝ってもらった。

先生の後にお風呂を借りてリラックスした。パジャマは買ってなかったのでまた先生の服を借りた。お風呂からあがって先生が部屋に案内してくれた。客間としてベッドとかも置かれた一部屋で買ったものも全部このクローゼットにしまった。

「先生明日何時に出られます？」

「8時くらいには出るつもりですが・・・水川さんは？」

「7時半くらいには出ようかと。」

「じゃあ私も一緒に出ます。」

「先生そんなことまでして頂かなくても」

「だから私の好きなようにしてるだけです。これから水川さんの時間に合わせられれば朝だけでも一緒に出勤しましょう。」

「・・・はい。」

「では私は自分の部屋に戻ります。何かありましたらいつでも呼んでください。」

「分かりました。おやすみなさい。」

ドアが閉まったのを確認してからベッドに横たわり、時間を見る。まだ9時だがせっかくの休みだから早く寝ようかな。本当に今日が休みでよかった。

明日から仕事か・・・。一人になった途端急に昨日のあの瞬間が蘇る。そして幼い頃あたしを殴る父の顔と手とまた重なってしまう。どうしてこのことには弱いんだろう。物心ついた頃にはもう母と父は仲が悪くてその中で暮らしていくためには自分が強くなるしかなかった。誰にも涙は見せず、弱音も吐かない。自分のことには責任を持つ。そして父から自分を守るために力が欲しかった。

誰よりも強く、気高くあるために。

だが夜になって友達もいなくなって一人になると急に隠していた弱

い自分が現れる。夜の闇が怖くて、あたしはひとりぼっちなんだよって言われるみたいで闇から逃げようとした。だから家を飛び出して気がついたら喧嘩ばかりしていた。知らない奴と喧嘩をするのは楽しかった。だって向こうもあたしも殴り合っているときは夢中でただ相手を倒すことしか考えていないから。弱い自分も、父親も、淋しさも全部忘れていられるから。

いつものあたしなら上司の手も簡単に振り払えたはずなのに。隙を見せてしまった。弱い自分はいらないのに。

今までのことが走馬灯のように頭をよぎった。いや、いや、弱いあたしは嫌い。誰もそんなあたしはいらない……！

「どうせこんなことだろうと思いましたがよ。」

あたしの背後から声がする。ゆっくり振り向くと

「私が出てつたから聞こえないとでも思ったんですか？悪いですが全部ドアの前で立ち聞きさせてもらいました。なんで一人で泣くんですか？」

気がつかなかった。自分が泣いていたことも先生がいたことも。

「ち、がうんです！泣いてないです！なにもな」

その瞬間あたしの両腕を先生がつかんだ。

「泣いていることを責めてるんじゃない！俺がこんなにそばにいるのになんで頼らないかって聞いているんだ！」

先生の顔があたしの顔にくっつきそうなくらい近くにある。この人すごい必死な顔してる……。

「だって、弱いあたしは見せたらだめだからっ！」

「そんなこと誰が言ったんですか？人間に完璧なんてないんです。」

あなたは確かに強いかもしれませんが。だけど弱い部分もあって強いあなたが存在するんでしょう？」

「弱いあたしがいるから強いあたしがいる・・・？」

「そうやって一人で溜め込むんじゃなくて弱いあなたも私は好きなんです。あなたの周りの人間もそうです。だから泣いていいんです。」

「ぎゅっ」と先生があたしを抱きしめて囁いた。

「ほんとうに・・・？こんなあたしでもみんな受け入れてくれるの？」

「ええ。人間なんだから辛いことがあつたらおもいつきり泣くんです。」

その言葉を聞いたら涙がもつとこぼれて何も見えなくなってしまった。

「ふっ・・・うっ・・・うっ」

先生に掴まって暖かい胸の中でおもいつきり泣いた。泣いてもいいんだと分かったら何もあたしを遮るものはなくなり涙は止まらなかつた。

ひとりじゃない。

弱いあたしでも一緒にいてくれる人がいる。

あたしの中の何かはじけた夜だった。



どっち？

何か重いものを感じ退かそうと動こうとしたがビクともしない。しようがないから重い瞼を開けると目の前に何かがある。

「！」

驚いたがなんとか声を抑え目の前のものを確認する。

先生……。

昨日は先生に泣いているところを発見されて抱きしめられて気が済むまで泣いたんだ。泣き疲れてあたしそのまま先生の腕の中で寝ちゃったのか？誰かの前で泣くなんていつ以来だろう……。誰かにあんなに暖かい言葉を言われたのも……。思わず泣き崩れてしまったが先生が起きたらどんな顔して会えばいいんだろう。あんな弱いあたしでもいって言っただけど、あたしなんかのどこが好きなんだろう。きつと先生は優しいから……。

あ、あたしが家事やるんだ！今何時だろう？

先生を起こさないように用心して腕の中から抜け出し顔を洗って軽く化粧をしてキッチンへ向かう。

キッチンは昨日先生のお手伝いをしたからだいたい置いてあるもの場所とかはわかった。普段では着れないようなブランドの服を着て料理をするのは気が引けたから寝てたままの格好で始めた。だらしなくて汚すのは申し訳ない。高級ブランド品なんてお金もないし、欲しいとも特別思ったこともなかったから身につけるだけで緊張しそう。

キッチンに立ちながら昨日の夜あたしを慰めてた先生の口調が途中から変わってたことを思い出した。あんなにきれいな言葉遣いをする人も「俺」とか言ったりするんだ。いつもあたしには「私」なの

に。

「水川さん」

突然声を掛けられてビクッとしてしまった。

「あ、先生。おはようございます。もうすぐ出来上がるのでちょっと待ってて頂けますか？」

「本当に作ってくれたんですね。おいしそうです。着替えてきますね。」

あ。

先生の笑顔。

「は、はい。」

何動揺してるんだあたし。いつも先生は笑顔でいるじゃないか。ただ目が合って笑いかけられたくらいで。だめだ、この人を好きになんてなったらこの人がかわいそう。あたしみたいな女らしさもなくて仕事が恋人みたいな仕事人間。しかも仕事相手なんて。

先生が顔を洗って部屋で着替えている間にあたしも急いで作った朝食を食卓に並べて着替えを済ませた。昨日買ってもらった服が多くてどれにするか迷ったが先生が先に着替えが終わってしまうかもしれないからすぐに決めた。春っぽくミントグリーンのフリルがついたブラウスに黒のスカート。家を出るときはベージュのトレンチコートを着るつもり。食卓に行くともう先生は座っていた。

「すみません。お待たせして。」

「大丈夫ですよ。早く食べましょう。」

いただきます、と2人と言って食べ始めた。味付けが気に入ってもらえるかちよつと先生の様子を伺っていると

「おいしいです。水川さんのご飯を毎日食べれる人は幸せですね。」

「そんなことないです。大学からずっと一人暮らしで振舞う人もいなかったですよ。」

「へえ……。是非ここに居る間だけでもお願いします。」

「このくらいならいくらでもやりますよ。あ、会社行く前に洗濯しますね。」

「ありがとうございます。あとで洗濯機の使い方教えますよ。」  
たわいもない会話で弾み、まだ6時すぎたばかりだったので食器を先生と一緒に洗う。

その時やっぱ昨日のことはお礼を言わなくては、と思い勇気を出してそのことに触れる。

「先生・・・、昨日の夜はありがとうございます。おかげでちょっと気が楽になりました。」

「いいえ、あなたが元気になったんだっただけいいんです。一緒に住んでるんですからまたいつでも頼ってください。」

住んでるってなんか語弊がある気が・・・。

「え、ええ。あの先生、普段はああいう言葉もおっしゃるんですね。」

「ああいうつていうと?」

「その、俺とか年下の私にも敬語なので常に敬語なのかと思っていました。」

気になっていたし、話題にはいいかなと思って話に出してみたがあたしが洗った食器を拭いていた先生が無言で布巾を置いた。

「先生?」

怒らせたのか!? 馴れ馴れしかった?

戸惑いを隠せないでいるとシンクの前に立っていたあたしの両脇に後ろから手を置き背の高い先生にあたしは覆い隠されるようになった。

「そりゃ俺だつて好きな女の前じゃ普通の男だよ。普通に触れたいし、キスだつてほしいし、セックスだつてほしい。」

せ、せつくす!?!?!?

え、今先生の口からとんでもない言葉が次々出てきてますよ!?

あたしの背後から低い声で囁かれ逃げ場をなくしたあたしはますます戸惑ってしまう。あたしがそのまま黙っていたら今度はあたし

の髪に先生が顔埋めてきた。

こういうときどうすればいいの!?

男の人にこんなことされるの初めてで分かんないよ!

「でも昨日は何もしてないよ。君を抱きしめたまま何もしないで寝るって結構苦痛だったんだよ? 本当はそのまま我慢しないで抱きたかった。」

そんなことさらつと言わないでください!!!

「・・・でも君が俺を好きにまでは手は出さないし、俺も我慢するよ。早く受け入れた方がいいよ。もしかしたら暴走するかもよ?」  
それだけ言つとやつと腕を離してくれてあたしは解放され、何とか立っていられたが食器を落とさないように気をつけた。少し離れた先生が今度は満面の笑みで

「男性はこういう生き物です。くれぐれも気をつけてくださいね。」  
・・・なんなんですかその切り替え方!?!?

まるで別人じゃないですか!?!むしろ一番危ないのは貴方だと思いましたがよ!

「はぁ・・・。」

その後は洗濯機の使い方を教わり洗濯物を干し終え約束通り一緒に出勤する。

あの会話の後からまた先生は元の優しく紳士的な先生に戻ったけど、いつあの意地悪な先生に戻るのかと内心ビクビクしていた・・・。

## 謎

早めに会社に着きコーヒを飲みながらパソコンのメールをチエックした。だんだんみんな入社してきて廊下が騒がしくなってきたところに美羽ちゃんがあたしのところに来た。

「藍さんおはようございます！ちよつと来てください！！！」

「え？何どうしたの？ちよ、ちよつと！」

美羽ちゃんに強引に廊下に連れ出され行くと掲示板の前に人が溢れていた。人の間を抜けて張り紙を見つけると

「何これ！？」

「あたしもびつくりしましたんですよ！！！！」  
そう。

そこに書いてあったのは人事異動の発表。うちの部も異動は毎年4月に多少あるが・・・今はまだ3月なのになぜ今？と思ったがそこに記されていた人物はあたしをこの前会議室に呼び出した上司全員だったのだ。しかも異動先はそれぞれ違うが地方の印刷所。つまり左遷、ということになる。

「なんでこの時期に異動なんですかね？あと数週間すれば会社全体で行うのに・・・。」

「謎ね・・・。」

確かにあの人たちは人をひがむだけであたしが入社してからは実績を残していると皆言いがたい。昔は腕のいい記者だった人もいるらしいが・・・。所詮過去の栄光にすがっているだけだ。ちゃんと歳をとってからも腕のある記者はたくさんいるんだから。だから別にあの人が左遷されても誰も不思議には思わない。ただ問題なのは時期なのだ。なぜあと数週間が会社は待てないのか？・・・あの人が何か問題を起こしたのか？

「でも藍さんよかったですね！これでライバル減りますよ！」

小声で美羽があたしにガッツポーズをしながら言ってくるが

「あんな人たちライバルなんかじゃないわよ。まあ確かに突っかかってくる奴は減ったわね。」

本当にライバルなんてとんでもない。ただ人を批判しているだけで仕事が出来ない人間をライバルにした覚えはない。ライバルというのは

「悪いがちょっと俺のところみんな集まってくれ。」

仕事をそろそろ始めようとおもっていたらデスクから部のみんなが集まるように召集がかかった。

「実は聖蘭会社の常務が昨日自殺したが、それが他殺かもしれないという情報がきた。それでそれを出来るだけ早くうちの部で調べろという辞令がきたんだが・・・」

何だと！？すごい気になる！聖蘭といえば服飾で上場している大手企業だ。近年は日本だけでなく海外にもたくさん出店して業績を上げている。もしかしたら何か秘密が隠されているのかもしれない。

「そこでこれは藤堂を中心にやって欲しい。サポートの奴は藤堂が好きに選んでいいぞ。」

集まっていた全員がデスクから奴の方へ視線を移す。

「ありがとうございます。頑張らせていただきます。」

拍手があがりあたしも一応パチパチ、くらいはする。こいつがあたしのライバル、藤堂正臣（26）。歳はあたしより年下だが、あたしは1年浪人して大学に入ったので同期にあたる。入社してからずっとこいつは出来る男だなと思っていた。おまけに他の女は「藤堂さんってかっこいい！」とか言ってる人気があるらしい。まああたしには関係ないことだが、誰もが認めるうちの部のエースである。あいつに仕事もっていかれるなんて悔しい！

仕事に戻りずっとパソコンとにらめっこしていつの間にかもう終業の時間である5時になっていた。今日は特に残ってやる仕事もなかったなので帰る支度を始める。美羽ちゃんに「呑みに行きませんか？」

と誘われたがお金は先生のだし、早く家に帰ってご飯を作って先生を待ちたかったので断った。部署を出てエレベーターに乗ろうとした時下から上がってきたエレベーターから藤堂が降りてきた。・・・今日一番会いたくなかった奴だ。

「おつかれ。水川もう帰るのか？」

「ええ。今日は残業するような仕事なかったから。あんたはこれから大忙しでしょうね。」

「まあな。この前の首相のはお前がやったんだから今回は俺の番だ。見とけ。」

「あつそ。せいぜい頑張んなさい。じゃあね。」

あいつは別に嫌いではない。今日異動になった上司たちと違って女子に対する偏見もなく、仕事が出来る奴は平等に接する。ただあいつには負けたくないだけ。

家の前に着いて朝家を出る時に先生から渡された家の合鍵で中に入る。まだ先生は帰っていないようだ。遅くなるかもしれないと言っていたので家事をとことんやるつもり。朝貸してもらった先生の工プロンを見に着け、まずは掃除から始める。ここに来たときからキレイにしてあったが。

## 変化

ガチャっという音をたてた。先生が帰ってきたんだろう。

「お疲れ様です。ご飯もお風呂も準備してありますよ。」

「ただいま。掃除してくれたんですか？」

「でも先生綺麗にしてらっしゃるからあたしがやることあんまりなかったんです。」

「いいえ、ありがとうございます。お腹がすいてしまったので先にご飯にしてもいいですか？」

「はい。すぐご飯持つてきますね。」

誰かと一緒に家でごはんを食べるなんて久しぶりだ。小さい頃から家族揃って食卓でごはんを食べることも殆どなかったから一人で済ませていたし、大学に入って上京してからは特に。一人で食べるほうが何も気にしなくていいし、楽だと思っていたけど、先生と2人でこうやってごはんを食べると人と食べるのも悪くないな、って思った。

「何ですかこの箱？」

「携帯です。とりあえずプリペイドなんですがないと不便でしょう。」

「でも、そんな……。」

「だから何かあったとき私と連絡とれないと困るからここに置いておくだけこれを使ってください。」

「はい……。」

これを買に行っていたから帰りが遅いつて言ったのか！

お風呂を順番に入ってお互い部屋に戻りあたしは携帯の設定をした。あ、ちゃんと先生の番号入ってる。だけど家に戻ったら早く新しい携帯買わなきゃ。

ゆっくり一人で眠りについた。

先生の家に着候し始めて5日目の夕方。

あたしは先生の研究室を訪ねていた。昨日の夜先生はあたしがここまで来るのが大変だから家で打合せしよう、と言ってくれたけど公私混同したくないんです、とあたしは言い、断った。

「次の原稿はこれです。」

受け取りチェックを一度して

「これでいいと思います。もし上司から何か指摘があったらメールします。」

「別にメールじゃなくて直接言ってくればいいですよ。」

先生！今日は研究室内に先生の生徒も何人かいるんですよ！聞かれたらどうするんですか！？

「・・・メールしますね？」

なんであたしがはらはらしなくちゃいけないの！？まあ別にバレても特にあたしの仕事では問題にはならないけど、生徒から痛い目で見られるのは先生なのに。

家に着くともう日付けが変わっているのに先生が夕飯を作って待っていてくれた。ここに来てからたまたま大きな仕事がなくて早く帰って来れたのに今日は会社に戻ってから上司が明日の朝刊に載せる記事にミスをしてしまったことが発覚。それからあたしと数人が血眼になって修正し、なんとか終電で帰って来れたのだ。先生には発覚した直後にすぐメールをして先にご飯食べて寝てください

って伝えたのにメール見なかったのかな？もしそうならすごい申し訳ないことした！！！」

「先生、もしかしてメール気づきませんでしたか・・・？ごめんなさい！こんなに待たせてしまって！」

「違いますよ、ちゃんとメールは見ました。でも水川さんが仕事で疲れた体で暗い部屋に帰って来るのは淋しいかなと思ひまして。迷惑でしたか？」

「いいえ！ありがとうございます。今まで一人で暮らしててそういうの慣れていたつもりだったんですが、今は淋しい気がします。」

「よかった。ご飯少しでも食べますか？すぐあたためますよ。」

「お腹すいてるんですー！あ、でも自分でやりますよ！」

あなたは疲れているんだから、と結局先生が遅い夕飯を準備してくれた。こんな夜中に全部食べたら絶対太ると分かっていたが、おいしいし先生がずっとニコニコあたしが食べているのを見ていたから残すのは気が引けた。

さつき家に帰る時、先生の家泊まってから明るい家で2人でご飯を食べて寝るのが普通になっていて『今夜は一人か』と思うと寂しい気持ちになってしまったけど、明後日にはここを出てまた元の生活に戻るんだから気を引き締めなくては。もう淋しいなんて思ってもそばにいるのは仕事だけなんだから。

お風呂から出てきてもまだ先生は起きて本を見ていた。この前言っていただけ先生は眠りが浅いらしく、長時間眠れないらしい。

「先生なんで打合せのとき人が周りにいたのに一緒にいることがバレそうなこと言ったんですか？危ないからやめてくださいよー。」  
軽い気持ちで言ったのに先生は読んでいた本を閉じ、あたしをまっすぐみつめたまま

「別にバレてもいいですよ。」

「だって生徒から誤解されちゃいますし、先生が大変ですよ。」

「大変なのはあなたです。これだけ私をかき乱してどうやってたら好きになつてくれるんですか？」

「……先生、それは先生の思い過ごしですよ！先生ならきつとすぐに可愛い彼女も出来ます。ただ私に同情なさってるだけですよきつと！無理にあたしみたいにな……」

最後まで言葉を言い切る前に座っていた先生におもいきり腕をひっぱられて立っていたあたしがよろけて先生に抱きつく形になってしまった。

「す、すぐどきますね？」

「どうして分かつてくれないんですか。こんなに好きだって言ってるのに。」

そう言うときあたしの手を握って先生の心臓に持っていた。

「わかりますか？あなたが私の腕の中にいると思うだけで私の胸はこんな風になつてしまふんです。自分でも年甲斐もなく馬鹿だなど呆れます。」

分かります。分かりますよ。先生の心臓の音はちゃんとあたしに伝わってきています。

どうしよう。あたしのせいで先生がドキドキしてくれるって考えた理由はわかんないけど、涙が出てきそう。

「あなたが私の気持ちを迷惑というなら忘れるよう努力します。でも勘違いしてるようですから言いますが、あなたへの私の気持ちは同情でも無理やりなものでもありません。あなただけがいいんです。ただ好きなんです。」

やめて。そんなことを見つめながら言われたら……。認めたくない。先生を好きだって認めたら傷つくかもしれない。一度好きになつたら先生に捨てられるときボロボロになつてしまうかもしれない。

「……あと一晩あります。明日の夜ちゃんと答えを聞きます。ただ私の気持ちは真剣だということを忘れないでください。」

あたしはその時何も言えなくてただ黙って部屋に戻った。

その夜は一睡も出来なくていつもより早く支度して2人分の朝ごはんは作ったけど、先生の方だけ残してあたしは先に家をおとした。

## 予兆

出社すると藤堂のデスクにだけ荷物が置いてある。この前のスクープの調査でここ何日毎日遅くまで会社にいるみたいだったけど・・・まだ誰もいないこんな時間にいるってことは帰っていないだろう。その時ゴソっという音がして辺りを見回すと部署の中にある大きめのソファの人に人影が見えた。近づくとネクタイを外し、シャツもはだけて寝ている藤堂がいた。まだ朝は寒いのに何もかけずに体を縮めて寝ているのは可哀相だったので仮眠用の毛布をかけた。

「ん・・・」

あいつが起きたみたいだったので給湯室に行つて2人分のコーヒールを用意してソファに向かう。

「おはよ。仮眠室で寝なさいよ。こんなところで寝たら体調崩すわよ。」

「・・・しょうがないだろ。疲れて仮眠室まで行くのが面倒だったんだよ。」

「まああたしもよくここで寝るから分かるけど。はい、これでも飲みな。」

まだ眠そうに寝ぼけている藤堂は大人しくあたしのコーヒールを受け取り飲み始めた。藤堂は身長も高いから体もかなり痛いだろう。

「やっぱり今回は調べるの大変なの？」

「ああ。チーム組んで手伝ってもらってもやっぱり大変だな。お前と一緒にやれば良かったな。」

「あたしもあの仕事やりたかったけどあんたに選ばれるなら断つてたから安心して。」

「お前はそんなに俺のこと嫌いなのか？俺はお前の仕事っぷりすごいと思ってるんだよ。」

「・・・あたしだってあんたは部署でもかなりの出来る奴だと思っ  
よ。」

「そりゃどうも。ていっかなんでこんなに早く来てるんだ？大きな  
仕事でもあるのか？」

「ないわよ。まあ、ちよつと早く目が覚めたから。」

「俺はもつと寝たいよ。お前本当に仕事に全部注いでるんだな。」

「やつと大きな仕事も任せられるようになって今を大事にしたいだけ  
よ。」

「けどこの歳なら遊んだり恋愛したくなるだろ？周りは結婚する  
奴だってたくさんいるんだから。」

「・・・会社帰りに呑みには行くけど恋愛は興味がないの。結婚願  
望も昔からないし、一人で自分の生活を謳歌した方が楽しいって思  
う。それにあたしのこと好きになってくれる男なんていないしね。」

「そうか？会社入ってから男ずつといないのか？」

「そうよ。だってこんなに女らしさもなくて男より強い女は無理で  
しょ。」

「確かに自分より仕事出来る女じゃ悔しくて嫌がる男もいるのかも  
な。」

「そういう男ばかりなら好きにもなれないってこと。」

「なるほど。けどそういう男じゃなければ考えるのか？」

「でも仕事で相手のこと考えてあげられないから可哀相で。」

「可哀相なのは男が決めることだろ。そんな心の狭い奴はだめだ  
な。」

「あら、なかなかいいこと言うわね。まあそんないい男がいれば考  
えるかもなあ。仕事に戻るわ。頑張んなさいよ。」

こんなに奴と話したのは久しぶりだな。入社した頃は気があってよ  
く呑みにも行っていたけど、だんだん両方仕事が忙しくなって疎遠  
になった。

あいつが言うみたいなあたしが放っておいてもあたしを愛してくる  
男なんているんだろうか。仕事が始まればあたしは仕事のこと頭

がいつぱいだから。

先生は・・・どうなんだろう。しかし先生を好きだと認めてしまつたら、彼にはまっけてしまつたら。片想いですらブランクがあるあたしが、初めて誰かを愛し愛される喜びを知ってしまったらあたしは変わってしまうかもしれない。淋しくても今のあたしを変えるのは怖い。

終業間に部署の中がざわざわとし始めた。

隣の机にいる美羽ちゃんが

「藤堂さんがあのスクープの裏づけと新しい情報手に入れたみたいですよ。」

「そうなの？さすがね。」

美羽ちゃんの話聞きながらもくもくと仕事を進める。今日はそこそこ忙しかったがもうすぐ帰れるだろう。だけど先生と顔を合わせにくいから出来れば遅くにこっそり帰りたい。明日出て行くときお礼は言わなきゃだけど・・・。

「水川」

「藤堂か。何？仕事忙しいんじゃないの？」

「さつき終わって後処理は頼んだから俺は帰るんだけど呑みにでも行かないか？」

もうあたしも支度して帰るだけだったし、家に帰りたくないし・・・。久々にこいつと呑むのもいいかな。

「いいよ。誘ったんだからあんたがおごってね。」

「しょうがないな。」

2人で会社を後にした。

## 最後の夜

藤堂がお気に入りの会社から近いバーに来た。いつも行くのは居酒屋ばかりだったからバーなんて久しぶりだった。

「どろいう風の吹き回し？あんだがあたしを呑みに誘うなんて。」

「朝久しぶりに話してどうせだからたまにはゆっくり話したいなって思っただよ。」

「ふーん。なんか企んでんのかと思っただわ。」

藤堂に適当にオーダーしてもらってカクテルを飲み干す。

「もつとカクテルの見た目とか感想ないのかよ。女はこういうところ来てもつと喜ぶだろ。」

「あたしが行くの居酒屋ばっかだし、酒はみんな同じよ。おいしければいいの。あんだの女たちはそうなんでしょうけど。」

「別に俺そんなに女の子と遊んでないけど。」

「だつてうちの部以外にもよその部の子もあんだのことかつこいいつてよく騒いでるわよ。前なんか紹介してくれて頼まれたわ。」

「それは光栄なことだな。生憎最近彼女はいないし。」

「意外ね。すぐにモてるんだから彼女出来るわよ。」

「・・・なんで分かんないかな。」

「え？声小さくて聞こえない。」

「独り事だから気にすんな。」

それから仕事のこと、プライベート、愚痴をこぼしながら藤堂とお酒を楽しんだ。大学の頃はお酒に弱かったが、入社してから人並みには呑めるようになった。呑みに行っても酔うということもなくなり、たしなむ程度にお酒を楽しめるようになっていた。

もう日付けも変わった頃

「水川終電大丈夫か？」

「・・・もうちょっとここにいたいのかも。最近うちの周り物騒だしタクシーで帰る。藤堂帰っていいよ。」

店内にはまだまだお客さんもいるし、帰る時タクシーを呼べば大丈夫だろう。

「じゃあとことん今日は付き合ってやるよ。」

「ええ！最近ろくに寝てなくてあんた疲れてるんだから帰っていいよ！あたし明日休み貰ってるからゆっくり出来るけど。」

「俺も明日休みだよ。」

え、こいつとお酒を呑むのは楽しいけどこんなに付き合わせるのはい悪い気がする。その会話の最中あたしの鞆から音楽が流れた。

「携帯鳴ってるぞ。出れば？」

「ごめん。」

鞆から携帯だけ取り出して画面を確認すると着信は先生だった。

「出なくていいのか？」

「うん。ちよつとね。」

「なんだよ教えるよ。」

流石に担当の先生のとこに居候してます、とは同じ会社の奴には言えない。上司にばれても問題はないだろうが、会社の人間にそういう女だと思われたくないし弱みを握られるようで嫌だな。

「別にいいじゃない。あたしにも色々あったんだったってことで。」

笑ってごまかすしかなかった。

3時頃タクシーで家の前まで藤堂に送ってもらいやつと家に着いた。

「今日はありがとう。あんたのお酒楽しかったわ。」

「じゃあ今度はお前が誘ってくれよ。おやすみ。」

「考えとく。おやすみ。」

タクシーを見送ってオートロックを解除してエレベーターに乗る。

この時間じゃ先生も流石に寝ているだろう。静かに鍵を開け音を立てないようにドアを閉め、靴を脱いでいると突然電気が点いて目がチカチカする。

「ずいぶん遅い帰りですね。電話も何回かしたのに無視ですか。」  
振り返って廊下を見ると電気のスイッチのところはネクタイはして  
いないけどシャツとストラップスのままの先生が立っていた。そして  
顔は笑っているけど今までに見たことないくらい怖いオーラを見に  
纏った先生が。

「お、大きな仕事が急に立て込んでしまつて。すいません、連絡す  
る時間がなくて。まさか先生がこんな時間まで起きているとは思わ  
なくて。」

なんとなく先生が怖くて視線を合わせることが出来ない。ようやく  
靴を脱ぎきつて先生の横を通りすぎようとしたのに腕を掴まれてし  
まつた。

「へえ、こんなにお酒の匂いがするのにそんな嘘つくんですか。」

「それは仕事の後の付き合いつていうか・・・。」  
言い終えた後に腕を引つ張られ壁にたたきつけられた。痛くはなか  
つたけど、驚いて声も出ない。逃げようと思つたのに顔の両側に手  
を置かれ何も出来なくなつてしまった。

「俺の目見て言えよ。今日が最後の夜なのに仕事つて嘘ついて帰つ  
てこない程俺が嫌いか？」

口調が突然変わった。どうしよう・・・。

「せ、先生のことは仕事相手として尊敬してますし、今回は私の私  
事のミスなのにこのように泊めて頂いてありがたいと思つています。  
・・・。」

「俺はそんなこと聞いてない。俺のことをただの男として愛せるか  
愛せないかきいてるんだよ！」

そんなの・・・こんなに優しくされて、かつこよくてしかも好きだ  
つて囁いてくれて。仕事とか自分の性格とか、全部取り除いてこの  
人を見つめたら・・・好きになつてしまふに違いない。

「正直に言つと仕事も自分のことも世間体も忘れたら・・・あたし  
がただの女になつたら・・・先生のことがす、好きですよ！だけど  
あたしはあなたの担当で、仕事ばかりで今まできて性格もこんな

んだし見た目も普通だしこんなあたしを先生みたいな人が好きになつてくれる要素はひとつもないんです！それに27でいまだにちゃんとお付き合いました人もいないんです。片想いだつてもう」

言っている途中で涙が出てきてなんとか言葉を紡いでいたのに言えなくなつてしまった。それは先生があたしの唇を塞いでしまったから。先生の唇で。もう口紅も取れてうるおいもなかったのに、先生が手であたしの頭を固定してまるであたしが離れないようにしつつこくキスをしてきて何も考えられない。学生のととき酔つてキスはしたことあつたけど、こんなキスは初めてで先生にされるがままという感じ。なんとか呼吸をしようと口をあけると舌を入れてきてますます苦しくなる。空いた腕で先生の胸を押すが力が出なくて多分ろくな抵抗になつていないだろう。普段なら男なんかに負けないのに目の前に先生の顔があつてこんなになつてもう何も出来ない。

「んんっ………んっ………」

「好きだ。あなたが本当に好きなんだ。あなたが一度でも俺を好きつて言つてくれたならもう手加減しない。」

先生がキスの合間になにか言ってくるけど、何も分からない。あたしの頭は溶けたみたいだに思考が出来ない。ようやくキスの波から解放してもらえたけどあたしは呼吸を整えるのが精一杯でまだはあはあ言つていたらひょいっつと持ち上げられた。

「きゃっ！」

足が浮いたと思つたら先生にまたお姫様だっこつていうやつをされていた。

「どこに連れていくつもりですか！？」

「俺の寝室」

え？なんで寝室？あたしの寝室じゃないの？

あたしが謎に感じているのが顔に出ていたらしく

「鈍感だな。ベッドで男と女がやることなんてひとつだろ。」

それって……。無理無理！！あたし実は処女なんです！27で処女つて悩みだったし、第一男は面倒だつてよく言うじゃん！

頭の中がぐるぐると回っている間にいつのまにか先生のベッドにいた。

「大丈夫。優しくするから。」  
はっとして

「だめ、だめです！・・・あたしこっぴつことするの初めてなんです。だから」

「それは尚更嬉しいな。」

「そ、それにまだあたしちゃんと答えてないです！」

「なんでもいい。俺に少しでも恋愛感情を持てるならそれでいい。」

今だけでも仕事も世の中のこととも忘れてただ俺を見て。」

今だけ・・・今夜だけ・・・

もう処女を捨てられるのもこれが最後のチャンスかもしれない。

それに嫌いな奴よりは好きな相手に一度でいいから抱かれる方が絶対いい。例え最初で最後までも。

目の前にいる先生に抱きつき

「お願いします・・・。」

と言っで。

## 最後の夜（後書き）

18話と19話の間の話はムーンライトノベルズに掲載する予定です。

## 決意の朝

目を開ければカーテンのむこうはまだ暗い。部屋の時計を見れば5時を過ぎたところだった。あのままあたしは寝てしまったみたいで裸でベッドの中にいたけど・・・先生が抱きしめてくれていて寒くはなかった。目の前にある先生の寝顔はやっぱり綺麗で思わずドキドキしてしまったけど、ここから早く離れなくては。この前もこういうことがあったけどあのとときは違って二人とも何も身につけていなくてはずかしい。先生をまた起こさないようにゆっくり腕の中からすり抜けてシーツを体に纏い、自分の部屋でここへ初めて来た日に着ていた自分の服を着る。シャワーを浴びたかったけど、一刻でも早くここを出たい。

先生に頂いたものは全てここへ置いていき、ただ自分の身ひとつで出て行こう。

あたしにプレゼントしてくれたとはいえ先生に買ってもらったものだし、それに・・・

もし何かひとつでも持って行き、自分で持っていたら気持ちが揺らぎそうだから。

大家さんのところに行ったら新しい家を探そう。できるだけここから遠いところへ。

先生の担当は美羽ちゃんにでも替わってもらおう。きっとデスクに言えば怪しまれてあたしのキャリアに傷つくだろうが、先生のそばで傷つくよりずっとましだ。こんな考え方、先生と出会う前のあたしじゃ考えられないだろうな。



「へえ？散歩に行くのになんでこんな置き手紙がある？」

もうだめだ。ばつちり証拠がある。どうにも言い逃れが出来ないと分かって、あたしはいつもの半分も出ない力を振り絞って先生の腕を振り払おうと暴れてみたが

「そんなことしても勝てないから。君は女の子で俺は男なんだよ。」

「だって！！！！だって、好きだってどうしようもないことはたくさんあるじゃないですか！？」

「何が！？何がどうしようもないんだよ！？」

「だって・・・それは・・・あたしは記者で、女としての魅力もなく・・・Hも昨日がはじめてで、何もせんせいにあげられるようなものもないし、絶対仕事で先生のことおろそかにする・・・それに！！！！これ以上先生のそばにいたらあたし・・・先生のことが好きになりすぎてきつともつと弱くなるんです・・・弱くなつて、自分を支えきれなくなつて、先生に捨てられたらボロボロになる・・・。そんなみつともないあたしになるくらいなら辛くなる前に離れたほうがっ！」

大声を張り上げ、涙がこぼれているあたしを今度は正面から先生が痛いくらい強く抱きしめた。

「いやっ！離して！！！」

「違うだろ！相手のことを想って悲しんだり辛い気持ちになつたり、弱くなつたりするのが人を好きになるってことだろ！？弱い姿を曝け出して何が悪い！？俺が傷ついたら君に支えて欲しいし、君が弱くなつたら俺が支える。それに君が仕事を最優先にしようとも構わない。俺は二の次でいい。そんなことで諦められないんだ・・・！君が俺を捨てても俺が君を捨てるなんてことは絶対ないと思うけど・・・例え俺と別れてもそういうこと味わつてこそ人間の人生だろ？」

一旦言葉を止め、あたしの顔を両手で持ち上げじつと見つめながら

「君がそんなに俺に愛されている自信がないなら毎日でも俺が好きだって伝える。それに仕事には自信があるのに俺や自分のことにな

ると途端に自信をなくして弱くなる君が俺は好きなんだ。だから君は何もしないで俺のそばにいてくれるだけで俺には十分すぎるんだ。

「流れていたあたしの涙が更に流れ始めて言葉が上手く出てこなかった。」

「そんなあたしがいいなんて今まで誰も言ってくれなかった。親も、友達も、昔の好きだった人も。」

「先生の前から黙って消えようとした女にまだそばにいて欲しいって言うってくれるんですか……？」

「う、ううっ……ほ、ほんとは……ずっとせんせいのこと、好きでっ……！でもっ」

「……うん。うん。」

「でも、すなおになれなくて……好きになるのがこわくってっ！好きなんです……」

「好きだったんです……せんせいが、好きですっ……！」

「わかった。うん。ありがとう……。俺も好きだよ。」

「しゃっくりをするほど泣いているあたしの酷い顔に先生が口付けを落とし、あたしが泣き止むまであたしを捕まえた時とは別人のように優しいいつもの先生の笑顔であたしを抱きしめてくれた。」

夜も明け、窓の外が明るくなり始めた頃にやっとあたしは落ち着き、リビングに戻っていた。

「藍、お風呂入ってないでしょ？」

「あ、はい。」

「入ってこい。それとも一緒に入りたい？」

「な、なに言ってるんですか！？一人で入ってきます！」

急に敬語をやめて、意地悪な先生になつてちよつとドキドキが止まらない。早くなれなくちゃ絶対今みたいにあたしをからかってくるもん！

さつとシャワーを済ませて髪を軽く乾かしてすっかりあたしのパジャマ化している先生の服を着る。

「先生ありがとうございました。」

キッチンを覗くとエプロンを着けて料理をしている先生がいた。

「あたし代わりますから先生お風呂入ってきてください。」

「……………」

先生の横に移動したけど何も言わずにあたしをじつと見つめているだけ。

「…………何かあたししちゃいましたか？」

「…………逆だよっ！もうこんなの夢みたいで……………」

先生が自分の顔を抑えてしゃがみこんでしまった。あたしもつられて先生の前にしゃがみこんでみる。

「今俺の顔見るな。」

「なんでですか？夢じゃなくて現実ですよ。先生もしかしてまだ寝ぼけてるんですか？なら尚更お風呂」

「本当に鈍感だな！俺は嬉しいんだよ！！！！こんななさけない顔見られたくないんだよ！」

「・・・それはあたしも同じですよ？さっきまでこんなこと想像出来なかったのに、あたしを一瞬で変えてしまうのはいつも先生なんです。」

「さっき弱い姿も曝け出せって言ったの先生なのになんで隠すんですか？先生っ！」

「あー！！！！もうお前生意気！」

先生の目だけ指の間から見えていたけど、そのまま先生があたしに勢いよく近づいてきてキスされてしまった。2回目のキス（昨日ベツドでいっぱいしたけどそれを抜いたら！）が突然きてびっくりしたけど、しゃがんだまま先生との啄ばむような軽いキスを楽しんだ。

その時幸せってこういうことを言うんだ、って初めて知った気がした。

仕事でどんなに褒められたり、大きな仕事を成功させても埋まらなかったあたしの心の一部ってこんな幸せのことだったんだって、27歳にしてやっと味わうことが出来たみたい。

## 衝突

先生がお風呂から出てきて一緒に朝ごはんを摂っていると

「お前あのままあのアパートに住む気か？」

「先生から逃げるなら引越そうと思っていたんですけどその必要もなくなつたし、鍵だけ新しいのに変えてあそこに住むつもりですよ。」

「そんな計画練つてたのかよ……。そうじゃなくてあそこにまだ住むつもりなのか？オートロックも管理人もいないあんなにセキユリティーの甘いアパートにお前一人住ませるのはだめだ。」

「……。なんで先生にそんなこと指図されなきゃいけないんですか？仕事と一緒にこれはあたしの問題です。どうしようとあたしの勝手です。」

「やばい。ちよつと強く言いすぎたか？でもいきなり『あそこに住むのはだめだ！』とか指図する先生だって悪い。」

「そうか。じゃあ勝手にしろ。」  
「ええ。そうさせていただきます。今日はあたし一人で出かけますので。」

あたしは一足先に食べ終わった食器を片付けて部屋に戻った。

なんなの！？いきなりあの高圧的な態度は！！！！

まるで俺の言うことを黙って聞いてればいいんだ、的な発言！

男ってみんなあんななの！？先生は違うと思つたのに仮面の下はそんな男だったのか！

……。やっぱりあの時なんとかして出て行くべきだったのかな。

とにかく着替えて大家さんのところに出かけようとしたが一応出かけるのくらいは伝えといておこう、って思つたのに先生の部屋をノックしたが何も反応がない。

「先生、あたし出かけますよ？先生つてば！」

いくら怒つても反応くらいしてよ！あんたあたしより11も上でしょうが！

失礼だと思つたがもう我慢できなくなつて部屋のドアを開けたがそこにはきれいに整頓されたものだけで、先生はいなかった。

家中探したがどこにもおらず、つまりはあたしが部屋に戻つて支度している間にどっかへ出かけてしまったのだ。・・・あの野郎！どんだけ大人げないのよ！

しょうがないからそのまま鍵を閉めて大家さんの家まで電車で行つた。

「そんなことがあつたのね。ごめんなさいね、そんな大事なときに出かけていて。」

「いいえ、こちらこそお疲れのところ朝早くから突然押しかけてしまつてすいません。」

「いいのよ！それよりそんなことがあつたんじゃないやうちはセキュリティも甘いし、危ないわね。どこかに引越した方がいいんじゃない？」

「いいえ。私あそこが気に入ってますし、鍵を変えれば大丈夫ですよ。」

「でもあたしも心配よ。藍ちゃんみたいな若い女の子一人でこのまま住ませるなんて・・・。」

大家さんは子持ちの主婦で、長年お世話になつていてすっかりあた

しを娘のように接してくれる。あたしも母のように慕っている。

「私そこら辺の女の子と違って強いですよ！男一人くらい簡単に倒せませすよ。」

「だけど・・・本当に気をつけてね？」

「はい。ありがとうございます。」

大家さんの家から出て住宅街を歩きだしたら後ろから車のエンジン音がした。一応構えていると急にあたしの横まで来て止まった。走って逃げようとしたら

「藍！俺だから！待て！」

よく車を見ると先生の車だった。家を出るとき駐車場に先生の車がなかったから車で出かけたんだとは思ったけど。

「・・・こんなところでなんですか？」

「いいから乗れよ。」

「嫌です。なんでですか？」

「少し話がしたいだけだから。頼むよ・・・。」  
あんなに強気な人がそんな弱気になって頼んでくるのを見たらなんだかあたしが悪いことしてる気分になってきて

「・・・じゃあ乗るだけですからね。どうせならうちのアパートまで送ってください。」

理由をこじつけて車の助手席に乗った。

車を止めたまま話を始めた。

「煙草吸ってもいい？」

「どうぞ。で、話ってなんですか？」

「・・・このまま俺の家で暮らさないか？」

え？今なんとおっしゃいました？

「なんか一言くらい言えよ。どうだ？」

「な、なんで急にそんな話が変わるんですか！？」

「変わってないだろ。あの家に住みたいのは分かったけど、いくらすぐ近くに住んでもあんな危ないところに一人で住ませるのは心配なんだよ。だから俺の家に来ないか？あの部屋は今まで通り自由に使っていいから。」

絶対また喧嘩が始まると思ったのにいきなりそんなこと言うなんて思ってもいなかった。なんであたしがあそこに住み続けることに怒っていたのかわかんなかったけど・・・もしかして心配してくれたの？

「あ、あの」

「俺と住むのが嫌ならせめてちゃんとセキュリティの整ったところ俺も探すの手伝うから」

「あの！そうじゃなくて、先生が怒ってたのってあたしのこと心配してたからですか・・・？」

「別に怒ってたわけじゃないけど、心配してたのはそうだよ。俺の言い方が悪かったしな。ごめん。」

家であんなに怒っているように見えたのに急に謝られるとあたしも困ってしまう。

「あたしの方こそごめんなさい！・・・今大家さんにもこの機会にちゃんとしたところに移ったほうがいいって言われたんです。あのとき先生がいなかったらあたしどうなっていたか分かんないですね。男には負けない自信があっただんですけどやっぱりもう敵わないのかもしれない。」

「大丈夫、これからは俺がいるから。」

「やだ、そんな恥ずかしい台詞真面目に言わないでくださいよ。」  
あたしが守ってあげる、とかは何度も口にしたことはあるが逆にあ

たしが誰かに守ってもらうなんていわれたことがなかったから笑ってごまかすしか方法が分からなかった。

なのに突然肩をつかまれて先生と正面から見つめあう形になり

「彼女なんだから真面目に言ってるに決まってるだろ。」  
とか言われてしまった。

・・・彼女。彼女ってあたし？でも今の言い方ってそういうことだよね？

「先生、彼女って・・・もしかしてあたしですかね？」

「はあ！？当たり前だろ！まさかお前そのつもりじゃなかったのか？」

「いいえ！・・・ただなんかよくわかんなくて。」

視線を逸らしていると先生の手が動いていて、見上げると先生が眼鏡を外していた。昨日の夜見たけど、眼鏡をしていない方がもつと若くみえる。

ちよつと見惚れているとただでさえ近かった距離を先生の手があなたの後頭部に伸びてきて、先生の方へ引き寄せられ唇が触れた。

「んんっ！ん・・・・・・。」

なんでいつも先生は強引なんだろう。大学にいるときの顔とはまるで真逆の性格で、意地悪で、強引だけど、どうしてだろう。嫌な感じはどこにも感じない。

やつと離れた時に

「キスしてるときは目くらいつぶれ。本当に何もかも知らないんだな。」

だってそんなこと大学でもどこでも習いませんよー！！！！

「すみません・・・。」

「いいよ。おかげで教え甲斐がある。全部俺が教えてやるよ。」  
「きゃ、きゃー！！！！」

「そんなことさらつと言わないで下さいー！」

「威勢がいいね。はいはい。結局家はどつする？」

「あの家は出ようと思います。けどこのままズルズル先生に甘えるのは嫌だし、新しいところ探します。」

「俺に甘えればいいだろ。」

「だってそれだと本当に何もかも先生頼みで……。」

「いいじゃんそれでも。別々に暮らしたらもつと会えなくなるから淋しいし、一緒に暮らした方が長く過ごせるだろ。それとも俺と生活するの嫌だった？」

「いいえ！楽しかったですけど……。」

「なら駄目？」

う、出た。また甘えるようにねだってきた！年上なのに、この仕草はなんて可愛いの！？

「……迷惑じゃないですか？」

「うん。むしろ一緒に暮らして欲しい。」

「じゃあ……お願いします。」

「うん。はあー。良かった。これでエロイこと毎日し放題だ。」  
「なんですと!？」

「なんですかそれ!？」

「当たり前だろ。楽しみにしとけよ。俺なしではいられない体にしてやるから。」

「酷い！やっぱり」

「取り消すとかなし。」

う、う、うわーん!!!また騙された!!!

やっぱりこの人天使の仮面をした悪魔だ!

## 衝突（後書き）

お気に入り登録100件超えました！ありがとうございます！これからも精進して参りますのでよろしくお願いします。

## 引っ越し

「じゃあさっそくお前ん家行くか。」「もしかして今日引っ越しするんですか!？」

「当然だろ。引っ越し業者ならさっき頼んでおいたから早く荷物纏めるぞ。」

最初っから先生の家に住ませるつもりだったのか!

1週間ぶりの家は特に何か変わっていたわけじゃないけど、先生がどどん片付けろ、と急かすので傷心に浸っているわけにいかんかった。

「家具とかは自分の部屋に置く必要最低限のものでいいよ。」

「え、じゃあ残りの家具は?」

「処分すれば?」

ええっ!?!確かに学生の中から使っているものばかりだから若干古かったし、先生の家已全部入れたら邪魔である。それに先生の家のもは全部モノトーンで統一されていておしゃれだし。結局色々言われて服とか日用品以外はたんすや本棚くらいしか残さなかった。

なんとか荷物を纏め終わったらすぐ引っ越し業者が来てあっという間に先生の家へと運ばれてしまった。

あたしの家の中も全て処分してしまっって見に来たらもう空っぽだった。

「君が水川藍ちゃん?」

あたしに呼び掛けてきたのは引っ越し業者のつなぎではなく、ちゃんとスーツを着た30代後半くらいの人だった。

「どちら様でしょう?」

「ああ、驚かせましたね。こういふ者です。」

突然名刺を渡され確認するとそこには大手建設会社社長の桐島蓮と書いてある！なんでそんな有名企業の社長がこんなところに！？

「あの・・・社長さんがどういったご用件でしょうか？」

「私は桐島と申しまして、宗方の大学時代の友人です。今朝突然あいつに引越しを頼まれまして、私の知り合いの業者を紹介させてもらいました。」

「そうだったのか！じゃなきゃこんな急に引越なんて出来なかっただろう。」

「そうだったんですか！本当に助かりました。ありがとうございます。」

「いいえ、事情は聞いています。大変でしたね。宗方はどちらに？」

「先生の家におられます。私はあちらに戻りますが、会いに行かれますか？」

「ええ、是非。」

社長さんと一緒に階段を降りて目の前のマンションにむかっていると「溺愛されているようですね。最近あいつの口からはあなたの話題しか出て来ませんよ。」

「そんなことはありません！優しくして頂いていますが、別に・・・。」

「学生の中から知っている私からしたらあなたへのあいつの態度は今までのどの女性とも違いますよ。」

「・・・やっぱり先生つてずっとモテていたんですか？」

「まあはつきり言えばモテました。黙っていてもあの見た目ですし、頭もよくて学生の頃から彼女はいつもいましたよ。遊びだけの子もいて30過ぎてしばらくするまでは結構遊んでました。まあここ何年かは大人しいですね。」

「やっぱり。女が先生を放っておくはずなかったのか。別に過去を知ったところで何も出来ないが。」

「だけど同棲するなんて初めてですよ。よっぽど大事にしているんですね。」

友人の人にそんなこと言われたら嬉しくなってしまうそうだったが、人の前で喜べるはずもなく

「そうですか。」

と一言返すことしか出来なかった。

「来るなら一言連絡寄越せよ。」

「藍ちゃんに是非お会いしたいなって思ってたさ。」

荷物が少なかつたおかげで引越しはもう終わり、業者も帰ってあたしは一人で自分の部屋に籠り片付けをしていた。先生は桐島さんとリビングで談笑している。多少声は聞こえるけど何を話しているかは分からなかった。

「お前のことだから物凄い美人の子かと思ったよ。しかも担当の子に手出しちゃったのか。地位を利用して無理矢理とかじゃないよね？」

「ちゃんと同意の上だ。・・・少し強引だったかもしれないが。」

「本当か？好きって言われたのか？」

「言われてないけど。別にこの歳でそんなこといちいち気にするかな？」

「俺なら気にするね。お前だって本当は聞きたいだろ。」

「別に。」

「まあいいか。ところで藍ちゃんがお前がずっと探してた子なんだろう？」

「探してたっていうかこの辺に住んでたのは知ってたけど、まさか俺の担当になるとは思わなかったな。」

「それをチャンスに言い寄って無理矢理・・・」

「桐島、お前はそんなに俺を悪者にしたいのか。」

一通り片付けも終わり、掃除用の服を脱いで自分の綺麗な服に着替えてリビングに戻ると桐島さんと話していた先生が気づいて

「片付け終わったのか？」

「はい。荷物少なかったですから。」

先生が桐島さんにむかって

「お前もう帰れよ。藍がいない間の話し相手どうも。」

「先生！桐島さんのことそんな風に酷い！」

だけど桐島さんはソファから立ち上がり

「はいはい。邪魔者は帰りますよ。藍ちゃん、何かこいつに変なことされたらいつでも俺に連絡してね。」

「ありがとうございます。」

これを聞いた途端隣りの先生がじっと黙ってあたしの方を見ている・・・。

「じゃあまた遊びに来るね。」

「二度と来るな。」

玄関で先生と一緒に桐島さんを見送ってドアがしまった瞬間

「藍。なんで桐島の連絡先知ってる？」

「さっき自己紹介された時名刺頂いたんです！」

そんな怖い顔であたしのこと見ないで！

「ふーん。ところでこの後どうする？」

携帯を見れば今は夕方の4時。今日は有給を貰っていたが、もう出掛ける時間もない。

「どこかに夕食食べに行くか？」

きつと先生が連れていってくれる店はあたしが行かない高級店だろ

う。それよりも・・・

「それよりもあたしは家で二人でご飯食べる方がいいです。今日の朝といい先生とまともにご飯食べてませんからね。」

「普通外で高級料理食べたいとか女の方が言うだろ・・・。いいのか？」

「先生の今までの彼女さんはそうかもしれませんが、どうせあたしは安い女ですよ。」

ちよつと嫌味を言ってみた。

## 動揺

あたしの顔を覗きこんで笑いながら

「何？昔の女に嫉妬か？」

「まさか。別に先生ほどの年齢なら今まで女性とお付き合ひしていなかったほうがおかしいでしょう。」

その途端今度はため息をついて

「なんだよ。」

「すいませんね。生憎あたしは可愛くないんです。」

ややこしくなりそうだからすぐに先生から離れてリビングへ向かった。

違う。本当は桐島さんが言っていたことだっただって気になる。どんな人が好みだったのか、どんなことしてたのかとか、考え出したらキリがないくらい。

でもそんな感情を先生の前でむき出しにするのははずかしい……。

「藍、牛乳ある？」

「あれ？切れてますね。」

「まじかよ。じゃあ俺買ってくる。」

「ありがとうございます。はい。エコバック。」

「……はいはい。行ってくる。」

キッチンに戻って下準備を先に進めていようと思ったのに

『ピピピピピピ』

突然先生の置いていった携帯から着信音がして暫くするとそれが留守電に変わった。

特に気にしていなかったけど

『もしもし。真一？電話してくれるって言ったのそつちでしょ。今日どうなってるの？早く電話して。ピーピーピー。』  
別に女の人から電話が来たことはそんなに気にしてない。だけど『真一』って先生を呼ぶならきつと仕事関係の人ではないんだろう。

関係ない。あたしは・・・彼女のはず。ちゃんと言われたわけじゃないけど、昨日の夜だって・・・。

「ただいま。スーパー混んでた。」

「おかえりなさい。ありがとうございます。」

「あ、俺の携帯光ってる。着信か？」

「・・・。」

先生はそのまま携帯の留守電を聞き、あたしは先生の買ってきた牛乳を出して料理の続きを始める。聞き終わったみたいで携帯をポケットに戻してキッチンに来た。

・・・何も言わないのか。そりゃあたしには関係ないのかもしれないけど。

「先生座っててください。」

「え？2人でやったほうが早いしいつもそうだろ。」

「いいから。あと少しで作り終わりますから大丈夫です。テレビでも見て待っててください。」

「あ、ああ。」

先生をキッチンから追い払ったらまたイライラしてきてじゃがいもを思いつきり棒ですりつぶしていた。

「おやすみ。」

「おやすみなさい。」

お互い部屋に戻ってあたしは明日の準備をしていた。

・・・昨日あんなに色々はずかしい台詞言ったのに。

なのに今日は何もしないんだ。あたしのことなんかやっぱり都合のいい女なのかな。

やっぱり初めての女は面倒だったのかな。

こんなこと考えちゃうから恋愛って嫌なんだ。

好きなのに、好きだけじゃなんで上手くいかないんだろう。

## 誘惑

引越してから2週間後の昼休み、会社の食堂であたしはある人を待っていた。

「美穂、こっち。」

「あ、藍どうしたの？突然呼び出して。」

仙崎美穂（27）。あたしと同期で大学から一緒の友達。ただしこの子は入社以来秘書室勤務の超美人なただけ。大学のときうちの大学のミスコンにも出たりしてとにかくずっとモテてきたのはあたしが一番知っている。常に彼氏がいて、いつも金持ちのイケメンばかりである。だから恋の経験を積んでいる彼女だからこの話は一番相談相手にいいと思ったのだ。

「あのさ、ちよつと聞いて欲しい話があつてさ……。」

「何？珍しいね。藍からあたしに話なんて。」

美穂は自分で持ってきた弁当を、あたしは食堂のカツ丼を食べながら話し始めた。

「あのさ……実はさ……彼氏できて今一緒に住んでるんだ。」

「ええっ！！！何それ！？全然聞いてない！」

美穂のフォークに刺さっていたワインナーは驚きすぎて落ちた。そりゃそうだろ。しかも大学から今のあたしを知っている美穂ならこのくらいのリアクションは当然だろう。

「いろいろあつて急にそうなったから言うタイミングなかったんだよ。ごめん。」

「まあその辺は今度聞くことにしてあげる。で、本題は何？」

「……その、夜のことなんだけど……。」

「相手が下手なの？それとも何か言われたの？」

「むこうは11も年上だし、経験豊富みたいだからそれはないんだけど！初めては終わったんだけど、それからもう2週間も経ったの……。」

「初めてから一度もしてないと。」

「うん……。」

食堂は広くて昼休みで人で混みすぎて他の人の会話なんて聞こえないからこんなことも話せる。

流石に美穂にも自分の彼氏が担当の先生だということは伏せておこう。

「しかも付き合おうとかちゃんと言われてないし……。初めてで面倒だったのかな？」

「好きとかしてる最中には言われた？」

「う……うん。」

「ならまだいいんじゃない？同棲もむこうから言い出したんでしょ？藍から言い出すわけないだろうし。」

「そうです……。だけど一緒に住んでてまだ付き合いたしたばっかなのにそういうこと……。ないのって普通のカップルならおかしくない？」

「まあ確かにガツついてくる男が殆どだろうね。だけど……。藍のこと大事にしてくれてるんじゃない？」

「それはないよ！だとしても……。不安なんだよー。」

「ふーん。藍次の休みいつ？」

「え、えと……。明後日だけ。」

「じゃあ明日の仕事の帰り空けといてね。」

「ええ！？なんで？」

「いいからちよつと付き合って！1時間くらいで済ませるから。じやあね！」

「えー……！」

よく話が見えないまま美穂はお弁当をしまつて食堂から消えてしまった……。

次の日の夜6時。

「あ、やつと来たー。藍！」

「美穂！もう何ー！？これからどこ行くの？」  
会社のロビーで先に美穂が待っていた。

「まあちよつとあたしの行きつけの店に付き合うつもりで。」

「う、うん……。」

先生には今日ちよつと遅くなるかも、とはメールしていたから大丈夫だろう。

とりあえず美穂について行くことにした。

「ただいま帰りました。」

「藍お帰り。もう飯食べた？」

「いえ、まだです。」

「じゃあもう作ってあるから一緒に食べるか。」

「はい。部屋に荷物置いてきますね。」

自分の部屋に戻って荷物を置く。あたしは鞆以外にもうひとつ紙袋を持って帰ってきた。

紙袋から中身を取り出して見るが・・・

「やっぱり買うべきじゃなかったかな・・・？」

『コンコン』

あたしの部屋のドアがノックされる。

「は、はい！」

「あーい。夕飯準備できたから来い。」

「すぐ行きます！」

急いで紙袋の中へと元に戻して部屋から出て行った。

「先生もうお風呂入ったんですか？」

「ああ。俺は後片付けしてテレビでも見てるから入って来い。」

「は、はい。」

食べ終わった食器をシンクに置いて部屋に服を取りに戻った。

う、う、うーん・・・。

とりあえず今日買ってきた紙袋を脱衣所に持ち込んだ。

お風呂で念入りに体を洗い、髪の毛もいつもより丁寧に乾かす。

そして紙袋を取り出してもう一度それを眺める。

今日美穂に会社帰りにつれていかれたのはなんと下着ショップだったのだ。それも普通の下着ショップだけでなく・・・女の子が男と

そういうことをする時に着るような刺激的な下着が半分以上置いてある店だった。

「何ここ!？」

「藍はこういうところ知らないでしょう?」

「当たり前よ!なんでこんなところ来る必要あるの!？」

「あたしも男を誘うときこの下着よく買うの。他の店とかは安っぽい下着とかだけど、ここはエロさありの高級感もあるわけよ。」

確かに店の前を見た限りではこんな店には見えず、外装も綺麗でいい感じだなと思った。

「分かったけど・・・でもなんであたしもつれてくるわけ?」

「だから!ここで藍も下着買って彼氏を誘惑しなさいって!」

「ええ!?そんなこと」

「あつちがこないなら女の方から誘わなきゃ!あたしもそんなことたくさんしてきたから大丈夫よ。」

恋愛経験豊富な美穂が言うなら・・・やるべきなのかも。

「でも女から誘ってはしたないとか男の人って思わない・・・?」

「好きな女にそんなことされたら嬉しいから!あたしが保証するから安心してよ。これなんかどう?」

「う、うん・・・。」

そんな感じであたしは美帆に説得されて下着を買ってしまったのだ。何着か買え、といわれたがあたしはいっぱいいっぱいどりあえず1着だけ買って帰ってきた。

美穂に選んでもらって買ったのは黒のガーターベルトに紐パンの黒のスケスケのキャミソールである。だからブラは着けてないから・・・見えてしまう。可愛い系を勧められたが、あたしも無理だし先生の方が歳上なんだからせめてセクシー系の黒のこのセットを選んだのだ。

勇気を出して身につけてみたが、脱衣所の鏡で自分の姿を見るとんでもないことに気がつく。しかしそろそろここを出ないと長風呂で先生が心配して来るだろう。

もうやけだ!!!

『ガチャ』

脱衣所の扉を開けてリビングに行くとき先生はソファでテレビを見ていた。

「先生」

「ん？風呂あがったの・・・か。」

あたしが話しかけるとやつとあたしの方に視線を移してくれたけど途中で言葉を詰まらしてしまった。

あたしもこういふときなんて言えばいいのか分からず、ただ黙っている。

「早く部屋に戻れ。寝た方がいい。」

え・・・。

先生はまたテレビの方を見て、あたしなんか見向きもしてくれない。やっぱりあたしなんかに興味もなかったの？あたしが綺麗でもなければスタイルもよくないから？

「あ、あの！あたし明日休みだから」

「じゃあ疲れてるんだから早く休め。おやすみ。」

なんで？やっぱりあたしなんか一時の気の迷いだっただけ・・・。ただどあたしはもう先生のこと好きになっちゃたんです！だから恋なんてしたくなかったのに。こつやつてあたしみたいな女を好きになつてくれるはずもないのに。何勝手に彼女の気分になつてたんだろつ。

「そう・・・ですよね。先生からしたらあたしみたいな女面倒ですよね！男の人とろくに付き合つたこともないし、この前まで処女だったし。毎日同じ家にも先生はあたしに興味がないみたいですし、それにこんな格好しても何も先生が感じないほどあたしはやっぱり・・・きやああつ！」

部屋に戻ろうと先生の方に背を向けたらおもいつきり引つ張られて  
あたしはバランスを崩してしまった。

気がついたらあたしは先生の座っていたソファアの上に寝ていて、  
先生があたしの上にあった。

「なにするんですか！痛いじゃ」

「そんなに俺の理性を試してるならのってやるよ。覚悟しろ。」

言葉遣いは荒くなっても目つきは優しかったのに、今の先生の目は  
欲望でギラギラしているのがあたしでも分かる。

この前初めてしたときよりももっと。

やばい。

本能的に何か感じて急いで逃げようと体をよじったのに

「誰が逃がすかよ。」

「あ、んんんっ！」

後頭部を押さえながら息も出来ないほどのキスをされてしまった。

## 誘惑（後書き）

23話と24話の間の話はまたムーンライトノベルズに載せる予定です。

## 真相

「んんっ……」

身動きとろつとしたが、何かがあつて上手く動けなかった。だけど気持ちよくてこのままでもいいやーとか思つてじつとしている。

「藍、やっと自分から俺にくっついてくれるんだな。」

ん!?

眠いけど目を開けるとどアップの先生、じゃなくて真一さんの顔。

「!?!」

びっくりして離れようとしたら逆に引き寄せられてそのまま真一さんの上に乗ったままになつてしまった。

「は、なしてくださいっ。服着ましよう!」

「おはよう。それは嫌だ。服はリビングに脱ぎ捨てたままだから無理。」

そうだ!昨日は自分から誘つたら真一さんに滅茶苦茶に抱かれて……。

「じゃあお風呂!入りましょう!」

「朝から元気だなあ。もうちよつと余韻味わおう。セックスしたあと初めて二人で一緒に迎える朝なんだ。」

結局逃げることも出来ず、抱きついたままじつとしていた。お互い裸で恥ずかしい……!

「重くないですか?」

「全然。俺は藍の体も心も好きだから。」

そんな恥ずかしい台詞にはなんて返せばいいのか?

「……あたしも、好きです。あの、普段も名前呼んでもいいですか……?」

見上げて尋ねると何も答えてくれない。どうしよう。何か間違えたか!?

「あの、」

「初めて好きって言うてくれた！もう一度！名前で！  
ええ！？」

「そ、そんなこと言わせないください！」

「じゃあまた啼かせて言わせおうか？」

うつつ。怖い！

「す、好きですよ！真一さんのこと。」

更にぎゅつつと抱き締められた。

「ああ、嬉しいもんだな。名前呼ばれるだけでも。」

すつつつごい満面の笑みであたしの髪にキスしてくる。

「真一さん、くすぐつたいですつ。あ、今日仕事は？」

「・・・午後から授業ひとつだけある。休講にしようかな。」

あたしの髪に顔を埋めたまま言うてるけどちょっと本気に聞こえて怖い。

「だめですよ。今何時ですか？」

「8時。藍と離れたくない。」

「・・・真一さんが出勤するまで一緒にいますから。」

「・・・藍が俺に甘い。というか藍が俺に甘えて欲しい。」

まあ年齢的に考えたら年上のあなたが年下のあたしに甘えるのは普段からじゃ想像つかない。

「甘えてますよ、充分。」

「もつとわがママとか言うて。何か買つてとかでも構わない。」

「前いつぱい服とか買ってもらったじゃありませんか。それにそういう警沢は別にいりませんよ。」

「・・・いい子だな。いい子すぎてつまんね。」

「だって・・・好きな人なんてもう作らないし、出来ると思わなかったのに好きな人が出来て、その上愛してもらえるなんて充分幸せなんです。それにあたしが仕事で忙しくて何も言わないで支えてくださる。ときどき意地悪ですけど、真一さんは優しくすぎます。」

「そんなことない。本当はずっと一緒にいたい。仕事も行かせないでただ俺の腕の中心にいて欲しい。だけど藍の望む幸せはそうじゃな

いし、悲しませたくないから。」

「冗談でも嬉しいです。なんでそんなにあたしのことなんか好きでいてくれるのか不思議ですけど。初めて会ってからまだそんなに時間経たないのに。」

「・・・俺たちが初めて出会ったのは言っとくけど研究室じゃないからな。」

「え？どういう意味ですか？」

「そんな！あ、でもこんなに近くに住んでいたんだからあたしが気づかない間にどこかですれ違っていたのかも。」

「教えて欲しい？」

「まあ・・・気になりますよ。」

「じゃあ藍からキスして。」

・・・

この工口親父。

「なら結構です。」

逃げられないから顔だけでも背けた。

「嘘だよ。怒んなくて。」

「怒ってません。ただ工口親父って思っただけです。」

「親父はやめるよ。歳気にしてるんだから。」

工口はいいんですか。

「はいはい。それでどこで会ったんですか？」

「電車。夜・・・当時の彼女と満員電車乗ったとき。もう俺は彼女に対して冷めてたし、別れようかと思ってた頃で満員電車でただ疲れて自分のことしか考えてなかったんだけど、電車から降りたとき彼女がいなくてって時『おっさん！今この人に痴漢したでしょ！ちゃんとして見てたからね！』ってホームに知らない人のでかい声が見たら俺の彼女がおっさんに怒鳴ってたその知らない人の横で泣いてたわけ。驚いて俺はそのまま見ると痴漢したおっさんが走って逃げようとしたところその怒鳴ってた人が『逃げるな！』って追っかけてすぐ捕まえちゃっておっさんはホームでその人に押さえ

込まれた。その人おっさんを捕まえてから俺の彼女に『大丈夫ですか？怖かったですよね。あんな満員電車じゃ逃げられないし。』って泣いてる彼女のことすっごい慰めてて彼女の方がその人より明らかに年上に見えたけど、彼女はその人の腕にしがみついて泣いてたな。それで『お兄さん！貴方この人の彼氏さんですか？とにかく彼女の連れの方なら早く来て下さい！』って次は離れて立って俺に怒鳴り付けてきたんだよな。その頃にはさすがに騒ぎを聞きつけた駅員たちが来て、その人はおっさんの身柄を引き渡して俺と俺の彼女も事務所行こうとしたのに彼女がその人から離れず泣いて結局俺、彼女、捕まえたその人の3人で行ったよ。事務所で彼女が落ち着き初めて警察が事情を聞き出そうとした時に黙ってその人が事務所から出て行こうとしたから俺がせめてお礼言わなきゃだなと思って外までついていって『ありがとうございました。』って言ったら振りかえって『貴方彼氏ならあんな満員の中で自分の彼女くらい守ってあげて下さい！彼女車内で泣きそうな顔して耐えていましたよ。それに今も彼女は辛いのになんで彼女を事務所に残したままあたしなんかを追っかけてくるんですか？早く戻ってあげて下さい。』と説教をくらった。まさか俺よりもまだかなり若い人に説教されるとは思わなかった。だけどその人の言う通りだからもう一度お礼だけ伝えてすぐに事務所に俺は戻って、彼女の事情聴取が終わって帰るころになつてからその人に名前も何も聞かなかったな、って後悔したんだ。」

.....。

「藍、思い出した？お前だよ、痴漢捕まえて俺の彼女慰めて俺に説教もした年下のその人。」

「え、あの.....はい。その出来事は思い出しました。でも、.....その.....彼氏の顔は思い出せないんです。」

これを聞いたら真一さんは大きなため息をついて

「はあー。俺ってそんなに印象薄いのか。俺ずつと藍のこと探して

たのに。」

「か、彼女さんの顔は漠然と綺麗だなんていうのは覚えてるんですけど、彼氏さんの方には彼女守らずに何してるんだって怒りしかなかったので……。」

「うん。そうだよ。どうせ俺はどうしようもない男だよ。」

ああ。拗ねちゃったよこの人。

「ただって！あの頃男の人に不信感を持ってたころですし……ごめんさい。」

また盛大にため息をつく

「それから彼女とは別れてその電車のその時間に毎日乗ってその駅で降りるっていうのを1年繰り返した。でも一向に藍には会えず、4年近くが経とうとしていた。」

そうでしょうね。あの駅はうちの最寄り駅でも会社のある駅でもなく、たまたま出張で出掛けた先だったからあれから一度も行っていない。

「それが今から2か月前、俺のところに帝京新聞からコラム新連載の仕事依頼が来て、俺は今授業と研究で忙しくてそれどころじゃなかったから断ろうと思って会社に行っただ。何を言われても絶対断るつもりでさ。ところが会社に入って受付に行ったら何か揉めててなんだろうって覗いたら受付前で受付嬢にしつこくつきまとうてる若い男がいて、明らかに受付嬢が迷惑そうで可哀想だから止めようとした瞬間……またお前がそこに現れた。最初はお前だって分からずパンツでハイヒールの子が受付に来てその男に『彼女迷惑してるんだからやめたら？受付でみっともない。早く仕事に戻りなさい。』って一言だけ残してまた去るとき男がムカついたみたいでお前にうしろから殴りかかろうとして危ない、って俺も思ったのにお前はそれをかわしてその男を退治しちゃって受付嬢はお前に抱きついてお礼言ってたな。その時藍だってやっと気づいた。立ち去ろうとしたお前を追いかけてエレベーターと一緒に乗って二人つきりになれたから『今のかっこよかった。勇敢ですね。』って話しかけた

ら『いいえ。社外の方にお見苦しいところを……。ただああいう男が嫌いなんです。』と。もつと連絡先とか聞こうと思ったのに、藍が降りるフロアに着いちやっつて『失礼します。』って消えた。ただ藍の首から下げていたIDカードで名前と部署だけは確認したから新聞社の偉い人に社会部の水川藍を担当にしてくれるならいいです、って仕事も急遽受けたんだ。」

「どこから突っ込めばいいんでしょうか。」

「な、なんでそんな痴漢助けただけのあたしをずっと探してたんですか？」

「2回も女を助けるところを見てかつこよかったし、まさか俺に説教するとは。だからそんな強い女のことを知りたかった。強い女も好きな男の前ならどんな顔するのかって。」

それってただ興味がわいたからちよつと遊んでみようってことじゃない。

「……。ただ興味がわいて遊んでみようってことですか。」

「違う。俺の担当になって色々話してるうちに藍のプライベートがもつと知りたくなって色々調べさせてもらった。お前の住所、学歴、友人関係、恋人、そして家族関係も。」

「なんでそんなこと……。！」

「俺の話をもう少しだけ聞け。それで勉強も友達もお前が今まで本当は苦労してきたのは分かった。両親の離婚から始まってな。幼少期に父親から暴力を受け、やつと高校生で親が離婚。離婚後母親に引き取られて生活するが母親に新しい恋人ができ、家にいづらくなる。大学受験も1年浪人して早稲田に入学し、同時に家を出て一人暮らしを始める。だって母親はその恋人と再婚して子供も生まれて実家は新しい家族があるから。実家はお前がずっと夢見てた両親の仲が良くて、子供が笑って生活している理想の家族だった。お前は自分が邪魔に思って家を出て以来家には帰っていない。」

「そんなこと調べて楽しかったですか？可哀想だなんて同情して遊んでるんですか！？」

「だから聞け！あんなに身も心も男より強そうなお前が本当は普通の女で、でも誰にも言えずに全部自分のせいにして一人で全部背負っているっていうのに気づいて俺が守ってやりたい、俺を居場所にして欲しいって思い始めた。だからお前の家のすぐそばに引っ越したり、少し手荒なこともした。ひつたくりは守れなくて申し訳なかったけど。」

「・・・なんですかそれ。人の不幸を見て同情して、普通の女と違って面白かったんでしょ!?!」

ベッドで裸の男女がする会話じゃないのは分かってる。でも遊びなら許せない！

「そりゃ黙ってお前のこと調べたのは悪かった。だけどそうじゃない。俺にだけは弱さも辛いことも教えて欲しかった。それで支えてあげたい。そんなの全部お前が好きだからだよ。遊びじゃなくて本気で信じてくれないなら携帯の女のメモリーお前以外全員消すし、お前以外の女にはプライベートで会わない。信じてくれるまでなんだってする。俺はお前と」

「それ以上言わないで下さい！別に貴方が浮気しても何しても構いません。けどあたしに同情してちょっと遊んでいるだけなら話は別です。」

「同情でも遊びでもない！本気だ。浮気してもいいなんていうなよ・・・」

「あたしは別に人に頼らなくてももう」

「嘘言うな！本当は寂しいんだろ？俺の前では泣いてただろ。」  
「だって、だって。」

「み、つともない自分は嫌なんです。」

「みつともないわけない。例え藍がそう思っても俺はそう思わない。だから俺の前では全部さらけ出して。」

「・・・じゃあ浮気はしないで欲しいです、出来れば・・・。女の人と会うのは全然構いません。」

「ああ、他には？」

「勝手にあたしのこと調べていたのはちょっと酷いと思います。でも結局貴方のこと好きになっちゃったから許せますけど。」

「悪かった。だけどただ好きだったんだ。」

「はいはい。あとあたしと初めて会ってから4年間に全く女の人とそういうことなかったわけじゃないですよね？」

「……あの、彼女はいなかった！ちょっと一日だけとかはあったけど。」

「まあ過去のことはお互い関係ないでしょうから。」

「でもこれからは藍だけだ！藍も浮気すんなよ。浮気されたら俺何するか分かんないから。」

冗談に聞こえない気がする……。

「分かりました。早くお風呂入って来てください。」

「え？どうせなら一緒に入る？」

はい？無理無理！！あんな明るいところで体を見られたくない！

その後どんなに抵抗してもかなわず、結局一緒にお風呂に入らされました。（泣）

sweet holiday

「行ってくる。」

スーツを着た真一さんにキスされる。

「いつてらっしやい・・・」

あたしはというとベッドの中に逆戻りしていた。玄関まで見送ろうとしたけど、お風呂から出た頃には真一さんはご機嫌だったがあたしは立つことも出来ずぐったりしてたから。お風呂に一緒に入れば何かしらされるとは予感していたが、まさか朝からあんなにされるとは・・・。

「7時くらいには帰る。藍、俺が帰ってくるまでじっと寝てていいから。無理するなよ。」

「貴方がお風呂で無茶させたんでしよう！」

「しょうがないだろ。好きなんだから。」

真顔でそんなこと言われたら困る・・・でも昨日の夜もあんなにしたのにどれだけ体力あるのこの人！あたしだって仕事柄体力には自信があつたのに、研究ばかりしててあたしより11も歳上のこの人は何者なんだ。

「もういいですよ・・・気をつけて。」

「ん。」

彼はあたしの髪にもう一度キスを落として手を振りながら寝室から出ていった。

「・・・はあつ。」

あんなに甘い人だとは思わなかった。いつもクールで大人で冷静にしか見えなかったのに。夜もお風呂の中でも散々愛してる、とか囁いてあたしにも言わせてきた。お風呂なんて明るくて締めりのないあたしの体はつきり見えてる上に彼の思うままにされてしまつて死ぬほど恥ずかしかった・・・！

でもこんなにストレートに気持ちを伝えてくれる人は初めて。慣れなくて、まだどう返せばいいか分からないけどあの人に嫌われたくない。

真一さんの言葉に甘えてゆっくり寝よう。久しぶりの休みだし。気がついたらもう眠りについてしまった。

「んーっ」

目覚ましもかけずに眠ったのは久しぶりだ。ベッドサイドの時計を見るともう夕方の6時だった。たっぷり寝たおかげか、もう腰や体中の痛みは和らいでいて、ベッドから降りてリビングに行った。

確か真一さんは7時くらいに帰ってくるって言ってたよね。せめて掃除と溜まっていた洗濯をするか。だけどこんなに寝ちゃうとは思わなかった・・・。

パジャマからラフな格好に着替えて洗濯機をセットし、洗い終わるまでに掃除機をかける。

あ、夕飯作らなきゃ！

真一さんが帰ってくるまでに全部終わるか？

あー。もっと早く起きるべきだった！本当にゆっくり寝すぎた！なんかあたしここに暮らし始めてからどんどんいい加減になっている

！こんなんじゃきつと真一さんも呆れるよね・・・。  
7時まであと30分。

掃除はなんとか最低限終わったから洗濯すぐに干して・・・でもすごい量洗濯しちゃったんだよね。

そうやって悩んでいる時、あたしの携帯が鳴った。こんな時に仕事か！？

しょうがない、急いで電話に出て

「もしもし!？」

と思わずあたしが強い口調で言うと

「俺。藍起きてた?」

え。

真一さん!?

「あっはい!起きてました!」

「もしかして何か怒ってた?」

「いいえ!それよりどうしたんですか?」

「今仕事終わってこれから仕度するんだけど、飯作ったか?」

「・・・ごめんなさい!実はさっきまで寝ててまだ洗濯とかしてて」

「丁度良かった。今日は外で一緒に食べないか?」

「え?でも」

「たまにはお前も一日休め。いいな?」

「・・・はい。」

30分後にうちの最寄り駅で待ち合わせと言われて急いであたしも準備をした。どんなお店に行くか分からないけど、ちゃんとしないと一緒にいる真一さんが恥をかいってしまう!

彼にここに居候する時買ってもらった服の中からワンピースを選んで化粧もバッチリする。遅れないように家を出て駅へ向かう。

・・・真一さんは忙しいのにあたしが夜遅いときはいつもご飯とお風呂を入れて先に寝てて、って言っても何時までも待っていてくれる。あたしの休みの日くらいちゃんと掃除してあったかいご飯とお風呂を用意して待っていたかった。本当に真一さんにあたしは甘えてば

かりだ。

駅前に着くと

「藍。こつち。」

とタクシー乗り場のベンチにもう真一さんが座って待っていた。

「待たせてごめんなさい。」

「待つてないから。タクシー乗ろう。」

2人でタクシーに乗り、車はどこかへと走り出した。

「勝手に店予約したんだけどいい？」

「あ、真一さんに任せます。それよりごめんなさい……。」

「何が？」

あたしが謝ったら隣からあたしの顔を覗いてきた。思わずあたしも顔を上げて

「だっていつもあたしの帰りが遅くても真一さんはご飯とか全部用意してあたしのこと待つてくれるのに、あたしはたまにの休みでも何も家事してなくて……。」

「そんなことか。俺は好きでお前を待つてるだけ。お前の仕事は本当に大変なの分かつてるし家事くらい俺は苦じゃない。それに今日は久しぶりの休みなのに無理させたのは俺だしな。いつも一生懸命働いてるお前を今日くらいは家事とか家のことも忘れて休ませてやりたいんだ。第一俺たちまだデート一度もしてないだろ。」

「だけど先生だって仕事があつて忙しいのは一緒です。住ませて貰つてるのに何も出来なくて。それなのにあたしだけ甘えるのは」

「確かに付き合う前なら平等に家事はやるべきだ。でも今俺たちは恋人で同棲してる。ならお互いが足りない部分を支えればいいだろ。」

別にそれは甘えだとは俺は思わないし、そのくらいのお願いならいくらでも聞いてやるよ。」

「・・・いいんですか？こんな女と住んで。」

「はぁ。あれだけ昨日と今日したのにまだ俺の愛が分かんない？」

「そ、そんなまさか！充分分かってます！」

もうあんなに激しくされたら体が持ちません。

「うん。分かればいい。そうやって素直になれ。」

口角を上げてあたしを自分の方へ抱き寄せた。

「・・・初デートよろしくお願ひします。」

「うん。目一杯楽しませてやる。」

## デート

タクシーが止まったのは隠れ家のようなイタリアン料理店だった。なんでも真一さんのお気に入りのお店らしい。

「もう何年も来てる店なんだけど、高すぎずアットホームなところで落ち着くんだ。」

席に案内されて店内を見渡すとちょっと照明が暗くて決して店内は広くないが、でも綺麗に内装されてあたしも一目で好きになった。「あたしも好きになっちゃいました。何食べようか迷いそうですね。」

メニューを広げて見始めると

「良かった。高級なところの方がいいと思ったんだけど、藍はそういうのはあんまり好きじゃないかと思ってる。」

確かに仕事の接待や付き合いで有名店には結構行ったこともある。本当に美味しい料理もあるけど、ああいう堅苦しい店でご飯を食べるのは好きじゃない。だからプライベートでご飯に行くなら居酒屋とか庶民的な店がいい。

「そうですね。あんまりすごいところで食事するとあたしは堅苦しくて楽しくないんです。プライベートならお好み焼きとか居酒屋に行っちゃいますね。」

あれ。自分がおっさんみたいだっけってばらしてるようなこと言っちゃった!? 絶対真一さんも引いてるよね・・・?

不安で彼の顔を見ても無表情で何も読み取れない。

「そうか。じゃあ今度はお前のおすすめの店に連れてってくれ。」  
え・・・。

「真一さんそういうところ行くんですか?」

「もちろん。最近は仕事の付き合いばかりであんまりそういう店行けないけど、プライベートなら俺も居酒屋とかの方が好きだな。」  
ええー! 見た目や普段の様子からは想像出来ない。

「意外です。」

「俺だつて普通の人間だから。お前が誘ってくれるの楽しみにしてる。」

「うわー！」

「あたしも楽しみ！」

「藍決まつたか？」

「・・・えつと」

カボチャのグラタンかサーモンとアボガドのクリームパスタで迷っている。でも彼はもう決まってるみたいだし・・・。

「決めました。」

「どれと迷つてたの？」

え、言っていないのに真一さんに分かっちゃうほど分かりやすい顔してたのかあたし。

「あの、カボチャのグラタンと迷つてたんですけどサーモンとアボガドのクリームパスタにしよう」と

「じゃあ俺グラタンにしよう。」

「だ、だめです。真一さん決めてたんじゃ・・・。」

「ん？藍が迷つてるみたいだったからそれにしようと思つてた。すいません、注文お願いします。」

「あわあわあたしがしている間にもう先生が注文を済ませてしまった。」

「ありがとうございますました・・・。」

「いいえ。俺もグラタン好きだし。」

「うつつ。どんだけあたしを甘やかすんだ。」

料理が運ばれてくるまでたわいもない話をしていた。

料理がきて二人で食べ始めて

「おいしいっ。」

あたしの頼んだクリームパスタはしつこすぎず、アボガドとサーモンがよく絡んでて本当に美味しかった。

イタリアンはたまに友達とかに連れてってもらうけどここ最近食べたなかで一番好きかも。

「良かった。俺も初めてこのグラタン食べたけど美味しいな。藍ん？」

目の前にいる真一さんがあたしに向かってグラタンをすくったスプーンを差し出してきた。

これはもしかしてあーん、ってやつですか!?

「え、真一さん、あの」

「ほら口開けて。」

いくらここは小さいお店だし、知り合いがいないからって人の目が気になる。あーんとか男にしてみらうの初めてだし! だけどここで変に反応したら真一さんが傷つく。う、う、恥ずかしいけど……目を瞑って口を開ける。

しばらくするとスプーンが口内に入ってきて目を開ける。

「美味しいか?」

「は、はい……。」

「そうか。俺もパスタ食べたい。くれ。」

え。

あたしにもあーん、させるんですか!?! この年で!?!

「早く。」

もうやけくそじゃ!!

「……はい。あーん。」

パスタを絡めたフォークを彼の口に運んであげる。

「んー。うまいな、やつぱり。」

「あたしはもう恥ずかしくて死にそうです……。」

「ベッドでやってることに比べたらこんなの恥ずかしいとか」

「それ以上言ったら怒りますよ……!」

なんでベッドの話に持っていくんだ！あー、あたしが怒るって言ったら笑顔になった。それもものすごい意地悪そうな笑顔。

「はいはい。俺が悪かった。」

降参、って両手を上げたけど結局あたしが遊ばれて終わったただけだ。悔しい！

ム力つくからせめてもの抵抗で彼のグラタンから一番大きいカボチャを食べてやった。一口でいけると思ってた口にはりこんだけど、予想以上に大きくてモゴモゴしてしまった。

「俺のカボチャは美味しいですか？」

「ん、んふふっ！」

「美味しいのか。飲み込めるか？」

子供扱いすんなー！そりゃ貴方からみたら子供かもしないけど、もう27歳です！

やっとうごっくん、と飲み込んで

「余裕ですっ。」

とすぐにワインの入ったグラスを手にとり、飲んだけど。彼はどんな顔してるのか確かめようとしたら

「口の回りについてる。」

「えっどこですか？」  
すっ。

「ここだよ。」

彼がさらつとあたしの顔についていたカボチャを自分で取って食べてしまった。

「！」

「お前は小学生か。ん？照れてんのか？」

「違いますっ！」

顔が赤い気がするのもワインを呑んだせいだ。絶対違う！

食事を終え、支払いが割り勘がいいと言ったのにあたしが気づく前に真一さんが払ってしまった。帰りはタクシーを呼び、自宅に二人で帰った。

「なんで黙って払っちゃうんですか!？」

「彼氏だから。」

「それは理由じゃないです!世の中のカップル全部がそうじゃないですよ!」

家に入ってすぐ彼を問い詰めたのに彼はあたしをスルーしてさっさと靴を脱いでリビングに行こうとした。

「ちよつと真一さんっ!」

あたしも後を追いかけてようと靴を脱いで腕を引っ張ってやった。

「彼女の前だからかっこつけていたい。それが理由。まだ足りない?」

うっ。

整ったその顔でそんな表情されたら何も言えない……。

あたしが急に黙ってしまうと今度は真一さんがあたしの腕を掴み返してリビングまで連れて行かれた。

ソファーに座らせられて

「飲み直そう。レストランでは少ししか飲んでなかったし。」

あたしが頷く前に彼はキッチンに行って赤ワインとグラスを持ってきた。

「怒ってるのか?」

グラスに注がれたグラスを受け取り一気に飲み干してやった。

「もういいですよ……。」

真一さんも笑顔で自分のグラスのワインを飲む。

「一緒に寝ない?」

は？

いきなり話が飛んでいないか？

「はああああっ！？な、何言ってるんですか！？」

「俺のベッドでかいから二人で寝ても平気だし。」

確かに真一さんのベッドはキングサイズ。でもそうじゃなくて！！！！

「なんでですか！？」

「だって夜構ってあげないと藍が淋しがっちゃうだろ？」

その瞬間昨日の夜の事を思い出して顔が赤くなってしまっ。

「別に淋しくなんかありませんっ！」

「昨日はあんなに大胆だったのにな？」

この人笑顔でこんなこと言ってくるなんて本当に悪魔！

「もう忘れました！それに避妊しないなんて」

「お前の同意の上でだろ。」

「でもっ・・・この悪魔！」

ソファから降りようとしたのにこの人に後ろから抱き締められてしまっ。

「離して下さい！」

「本当に素直じゃないなあ。夜くらいお前を独り占めしたいんだよ。」

彼に後ろから首筋にキスされたり舐められる。

「や、やめて下さいっばっ！んんっ・・・」

声を出さないように必死で唇を噛む。今日出掛けるときに鏡を見て自分の体中に痣があつて驚いたけど、どうやらあれがキスマークつていうやつらしい。隠すのは大変なんだから！

「だめっ・・・！キスマークつけちゃだめえ」

「そう言われると余計つきたくなる。」

段々抵抗する力も抜けてだめだ・・・。

「明日仕事だから・・・」

「じゃあ手加減する。」

そうじゃなくて！やめるっていう選択肢があるでしょ！

「ベッド行こうか？」

そうあたしに話しかけながらワンピースの背中のファスナーがゆっくり降ろされる。余裕たっぷり口調がムカつく！

「明日に支障がない程度でお願いします・・・。」

「うん。」

結局彼の寝室へと連れていかれてしまったのだ。

sweet night (後書き)

次の話との間の話はムーンライトの方に気がむいたら書く予定です。  
R18になるとお思いますので嫌な方は避けて下さい。

## すれ違い

「藍、大丈夫？」

今日は美穂に呼ばれて昼ご飯を一緒にとっていた。いつもならあなたはコンビニとかで済ませるけど、美穂おすすめ会社の会社から近いカフェで。仕事でカフェはよく使うけど、このカフェめしは美味しかった。

「大丈夫じゃないわよ・・・！」

昨日は明日仕事だから手加減する、

とか言ったくせに結局一回じゃ終わらず、体のあちこちが痛む。

「11も年上なのに体力あるね！じゃああれ効いたんだ？」

「・・・まあ。でも恥ずかしくて死ぬかと思ったわ。あんたよくあんなの出来るね。」

「一回やれば慣れだよ。また一緒にあそこ行こうね。」

「やだ。ていうかあந்தの今の彼氏って誰なのよ？まだあの商社マシと続いているの？」

「まさか。うちの専務よ。」

「へえー、うちの専務・・・専務！？専務ってなんで！？ていうかどんな人！？」

美穂は今までうちの会社内のエリートとも付き合っていたが、まさか専務とは。あたしは生憎専務の顔を知らない。社長は入社式で見たから顔も分かるけど、ほかの役員なんてあたしみたいなひよっ子記者ではお会いする機会もない。

「今専務の担当秘書やってね。他にも専務の秘書はいるけど。お金持ちだし、権力もある、その上男前だよ。」

ふーん。まあ美穂ほど可愛い子ならその専務とやらが惚れるのも無理ない。

「でも専務っていうなら結構親父じゃないの？」

「他の幹部は年寄りも多いけど、専務はまだ34だよ。」

「じゃああたしと同じようなもんね。」  
美穂はすごい、と思いながらいつの間にか昼休みは終わってしまった。

部署に戻って仕事を再開し、順調に今日のノルマを終える。  
退社するのも久しぶりに早く、家には7時までには帰れそう。ロッカールームから出てエレベーターを待っていると

「水川。」

「ん？あ、藤堂。おつかね。」

資料室から出てきた藤堂と偶然会った。

「もう帰るのか？」

「うん。今日は大きい仕事なかったから順調で。」

「優秀だな。そう言えばお前飲みに行くの誘ってくれないの？」

あ、すっかり忘れてた。

「ごめん！あんたいつ大丈夫？」

「うーん来週以降なら。」

「じゃあ次の金曜は？」

「いいよ。」

「了解。金曜ね。おつかね！」

簡単に約束だけ済ませてエレベーターに乗った。

帰り道にいつものスーパーで買い物をして家で夕飯の仕度をしてい

るとあたしの携帯が鳴った。ちなみに携帯は先生と付き合い出した日に新しい携帯を買った。真一さんからのメールが届いており『仕事が大引いて今日は遅くなるから先に寝てろ。』夕飯一緒に食べれないのか……。彼があたしより帰ってくるのが遅いなんて今までほとんどなかったし、きつと日付が変わるまでには帰ってくるだろう。

暇だったので久々に雑誌を広げて読んで先生が帰ってくるのを待っていた。でもなかなか帰ってくる気配はなく、あたしはリビングのソファでそのまま寝てしまった。

「……………」

「藍、起きろ。今日仕事だろ？」

「ん……………朝!？」

体を揺すられて気がつくとも目の前には真一さん。そして窓の外は明るい。

「起きたか。昨日帰ってきたらリビングで寝てたからベッドまで連れてきた。顔洗ってこい。」

「なんとしたことか!!!」

先生を待っているつもりが寝た挙げ句疲れている彼にここまで運ばせるなんて!

「ごめんなさい!起きてるつもりだったのに……………」

「気にするな。夕飯温めて食べて良かった。朝飯は俺が作ったから。」

「本当にごめんなさい!」

あたしはさっさと着替えて真一の作った朝ご飯と一緒にとった。

「暫く仕事忙しいんですか？」

「ああ、再来週学会があるからその準備のラストスパートが大変だな。だから2週間は帰りが遅くなるから先に寝てろ。」

「次からは起きて待つてます！」

「お前だつて仕事忙しいんだから無理に合わせるな。本当に起きてなくていいよ。」

そんなに強く言うのはあたしに待つててほしくないから……？

「……分かりました。」

それから暫く彼は真夜中に帰ってきて一緒にベッドで寝てもあたしが朝起きるころにはもう大学に行つてたり、帰つてこない毎日が続いた。

同じ家に住んでるのにここのとこあたしは全く彼の顔を見ていない。けどあたしも仕事をおろそかにするわけにもいかないから気にしてられない。

「水川、今日何時？」

昼休みに自分のデスクでそのままご飯を食べていると藤堂がやつて来た。

あ、今日飲みに行く約束してたんだっけ。

「んー7時でどう？」

「了解。」

それだけですぐ藤堂は消えてしまった。最近朝方までの仕事はなかったから夜は一人家にいる。真一さんと会えなくて淋しいけど、仕事の邪魔だけは絶対したくないから連絡もしていない。だけど学会の日に連載の新しい記事を会社に持ってきてくれることになってるから会えるので我慢。公私混同したくなかったのにあたしだめだな。

## 予想外

「本当にこんなところで良かったの？」

7時を過ぎ、藤堂と二人会社を出てあたしの行きつけの居酒屋にいる。

「あんたがこの前連れてつてくれたことは真逆でしょ？」

ここはサラリーマンで溢れる立ち飲み屋。客はおっさんばかりで決してお洒落とは言えない。でもお酒もつまみも美味しいんだよね。

「俺もこういふとこよく来るし、こういふとこの方が安心するよねー。何頼む？」

藤堂はご機嫌のようだ。良かったーあたしも居酒屋の方が落ち着くんだもん。

「取り敢えず生！あと・・・」

それからつまみとビールを大量に注文した。

「そういえばお前今彼氏いるの？」

さっきまで仕事の話をしたのに急に話題が変わった。

「なんでそんなこと聞くのよ。」

「いいじゃん。で？」

「・・・まあいるわよ。」

「へえーどんな奴？」

「うちの会社にはいないような優しい人。」

「やっぱりうちの奴じゃないのか。でも社外の人ならお前の仕事が

忙しくてなかなか会えないだろ。」

「最近はお前の方が忙しいくらいよ。」

「ふーん。じゃあ会えなくて淋しいとか不満ないの？」

「仕事なんだからしょうがないでしょ。それにあたしみたいな女と付き合ってくれるだけで充分。」

「本当に不満はないわけ？」

「ないってば。優しすぎるくらいよ。あんたは彼女いないんだっけ？」

「ああ。好きな奴はいるけど。」

「あんたならすぐその人も好きになってくれるよ。」

「・・・そうだといいいんだけど。」

「いつもの自信たっぷりなあんたはどうしたのよ!」

お酒がだいぶ入ってあたしは気が高ぶってきた。テンションも高くなっていた。

「そろそろ帰んなきゃー。でんしゃなくなっちゃう・・・。」

「水川すっかり酔ってんな。こんなに酔ってたら一人で帰れないだろ。」

「だってさみしいんだもん・・・。」

そこからあたしの記憶はぶつつり切れてしまった。

「んー」

だるい体を起こしてあたりを見回すと自分の家ではないことに気づいた。

「え、ここどこ？」

昨日は藤堂と飲みに行つて結構飲んじゃったんだよね。

「おはよう。俺の家だよ。頭痛くない？」

目の前に上半身裸の藤堂が立っていた。

「きゃー！」

「ああ、ごめん。今風呂からあがってきたから。お前も入ってくれば？」

「あ、あの昨日は……」

「覚えてない？」

「途中から覚えてないのよ……あたし酔ってなんかやらかした！？」

物とか破壊してませんように。

「居酒屋で寝ちゃったから運んだだけ。別にお前暴れたりしてないよ。」

「良かったー！ひさびさに飲みすぎちゃってさ！泊めてもらっちゃつてごめん！あたし重かったでしょ。あ、今何時？仕事の前に一回家帰らなきゃ。」

自分の格好をみると昨日のまま服も皺がついている。

「……お前やっぱり彼氏と上手くいってないのか？」

「え？上手くいってるってば。」

あたしの鞆を見つけて中から携帯を出す。まだ朝の5時。始発に乗ればシャワー浴びて着替えに帰る時間はある。時間に気をとられて

藤堂の話の流れしていたら突然あたしの背中に誰かの体温を感じる。

「酔ってたお前が淋しいってずっと言ってた。俺ならお前に淋しい思いなんてさせない。水川、」

「ちよ、ちよっと！離して！あんたまだ酒抜けてないの!？」

後ろからあたしは藤堂に抱き締められてしまっていた。

「酔ってねえよ。なあ、俺お前のが好きだ。彼氏と別れて俺のところに来い。」

え、え、えええ!？

今までそんな素振りなかったじゃない!

「いきなりそんなこと言われても・・・!」

「本当はずっと好きだった。昨日の夜だって必死にお前に手を出さないよう我慢したんだ。」

嘘だ!今まで何年も一緒に仕事しててそんな素振り一度もなかったよ!

「だってあたしのこと男みたいに扱ってたし、最近なんて仕事の奪い合いみたいで・・・」

「確かに俺は色んな女と遊んでたよ。でもお前が俺のこと仕事のライバルくらいにしか見てなくて諦めてたからだ。だから仕事を頑張ってお前が俺を見てくれるだけで良かった。」

「なら今まで通り遊んでりゃいいでしょ!」

「それはお前が今までフリーだったから安心してただけ。俺は彼氏のこと聞いていてもたってもいられなくなった。」

抱き締められていた藤堂の腕が緩くなっただと思えば、藤堂に頭を掴まれてキスされていた。

何が起きているのか理解出来なくて固まってしまった。

でも次の瞬間はっ、っとして全力で藤堂を押し倒して立ち上がり鞆をとって藤堂の家を出た。



## 罪悪感

藤堂の家を出て全力で走った。まるで逃げるように。

しばらく無我夢中で走って朝日が綺麗な中なにも考えられなかった。体力に自信はあったけど、気づかない間にかかなりの距離を走ってみたいで一度立ち止まったら息があがってた。

呼吸を整えながら自分の唇に触れる。

嘘だっと思っていたけど、藤堂の唇の記憶が確かに残っていた。真一さん以外の人とキスしちゃったんだ……。中学生でもあるまいし、たかがキスくらいで騒ぐことじゃないけど、好きな人じゃないキスってこんなに悲しい。

唇をごしごし必死で擦っても忘れられない。嫌だったのに、忘れたいのに！

ずっと唇を擦りながら駅の方まで歩いて行きタクシーを捕まえて自宅に戻った。タクシートの車中はただぼうっと窓の外を眺めて。

家に着いて鍵を開けて玄関に座り込む。ああ、シャワー浴びて早く仕事の準備しなくちゃ。

ヒールだけ脱いで放心状態していると

「おかえり。朝まで仕事か？」

びくっ！！！！！！

あたしの肩に大きな手をのせているのは真一さんだった。最近仕事  
が忙しいせいで朝もこの時間ならもう仕事に出掛けたと思っただの  
に。なんで今日に限ってまだ家にいるの！？

「は、はいっ！ちょっと大きな仕事が入って！」

笑顔を作って立ち上がった。今真一さんの顔は見たくなかった。い  
や、見るわけにはいけない。

「おつかれ。俺はもう仕事行くけどあんまり無理するなよ。」

真一さんの横を俯いたまま通りすぎようとしたら頭にぼんっ、と彼  
の手が置かれた。

「・・・はいっ。いつてらっしやい。」

結局一度も彼と目は合わせられなかった。

出社時間ギリギリに会社に着いて仕事を始めた。部署内を一通り見  
渡すと藤堂の姿はない。ボードを確認すると藤堂は取材の為アメリ  
カに今日から出張と書いてあった。いつ帰ってくるのかは未定みた  
いだが、暫くは会わなくて済む。

それを見てちよつと落ち着いた。

それから真一さんの学会の日まで彼は毎日深夜に帰ってきて早朝に家を出て、あたしも仕事がそんなに忙しくない日でも朝方に家へ戻っていた。だから真一さんとそんなに話したりする時間もなかったし、もちろんスキンシップをとる暇もなくて良かった。

正直まだ真一さんへの罪悪感でいっぱい。

だから藤堂が出張から帰ってきてちゃんとお互い冷静になってから話して今回のことは終わりにしたい。

真一さん以外の人に告白されるなんて人生初だったし、藤堂のことは嫌いじゃない。あんなに仕事が出来てあたしも認めてるし、これからは出来れば友達でいたいのが本音。

学会の朝、家に帰ると先生は既に仕事へ行ったらしく、置き手紙が置いてあって

『今日は18:00くらいには会社に行けると思う。着く時メールするから。その後飯でも食いに行こう。だから俺が行くまでに絶対仕事終わらせとけ。真一』

仕事の後久しぶりに二人つきりで会えるんだ！って喜んだのに、その瞬間藤堂の顔が頭に浮かぶ。まだあいつのことが片付いていないのに真一さんと会うのはいいのだろうか。彼には今回のことは絶対知られたくない。きつとどうい理由であれ他の男にキスされて、って軽蔑されそう。真一さんにだけは嫌われたくない。

置き手紙を戻して一人あたしは会社へ向かった。

今日の分の仕事はそんなに多くない。順調に仕事を終わらせて最後の仕事だった記事も仕上げた借りた資料を書庫に戻しに行った。

あと今日の仕事は真一さんから原稿を預かるだけ。誰もいない書庫でしゃがみこんで自分の携帯を開く。

メールは0件。

結局ここ数週間真一さんと擦れ違い始めてから一度もメールしてない。

朝にあたしが帰って真一さんが仕事に行くっていう生活の繰り返し。

『ピュピュピュッ』

いじっていた自分の携帯が突然鳴ってびっくりしてしまった。真一さん？って思ったのにディスプレイにはまさかの藤堂の名前。

電話だったので出るか出ないか迷ったが、真一さんと会う前に解決しなかったから迷いながらも電話に出た。

「もしもし・・・」

「良かった、電話出てくれて。水川久しぶり。」

「どうも。用件は何？あんた今アメリカでしょ？」

「もう日本に戻ってきたよ。お前今手が空いてるならこれから会社に戻るから時間作ってくれないか？」

「・・・いいわ。じゃあ小会議室借りておくから来て。」

「分かった。」

パチン、と携帯を閉じ書庫を出た。

もしあの朝藤堂が言ってくれた言葉が本当でもきちんと言わなきゃ。

## 修羅場

「久しぶり。」

そういつて約束の小会議室に藤堂はやってきた。

「どうも海外出張おつかれさま。用件は何？早くしてくれる？」

もうすぐ5：30。ここにくるまでに真一さんから連絡はなかったけどもうそろそろ来てもおかしくない。

「それよりまずおみやげ。ほら。」

藤堂が自分の荷物からおもむろに出したのはある小さな箱。

「・・・何よこれ。」

「いいから開けてみてって。」

警戒しながらもしょうがないから開けてみると

「スノードーム・・・？」

「そう。お前のデスクにいくつも並べてあったから好きなのかと思っつて。アクセサリーとかの方がいいかとも思ったんだけどさ。」

実はあたしの仕事場のデスクにはスノードームがずつと置いてある。仕事上海外に行く機会も多いから行った先々で綺麗なスノードームを集めているうちにはまってしまったのだ。今では自宅の部屋にも結構な数のこれが並んでいる。

「これきれい・・・！あたしが好きなの知ってたの？」

「デスクの上に基本的に余分なものを置かない

お前が置いてるから。気に入ってくれて良かった。」

このスノードームは雪降るニューヨークの街並み。もうすぐ春の東京とは大違いだけど綺麗な雪景色だ。

「だ、だけどこんな個人的なおみやげ貰えない！」

「別にいいだろう。お前気に入ったみたいだし。好きな女が喜んでくれるだけで満足。」

今好きな女って言いました！？

この部屋にはあたしと藤堂しかないし・・・。

聞き間違いだきつと！

「あ、あのさ、この前のことは酒の場の延長つてことでお互い忘れてまた仕事仲間として・・・」

「じゃあもう一度言う。俺は水川が好きだ。付き合つて欲しい。」  
ひよえええええー！！！！

今確かにこの人あたしが好きつて言つたよね！？

「あのね、この前も言つたけど今彼氏がいて・・・」

「知つてる上で言つてんだ。まだ別れられないなら浮気相手でもいいよ。そのうち俺の方が絶対いいつて言うから。」

今度はそうきたか！

その自信はどこからくるんですか？俺様なところは真一さんと似てる・・・。つて真一さんとこいつをなんで比べているんだ！

「とりあえずこれは返すから。」

スノードームを返そうと藤堂の立っている会議用テーブルにそのおみやげを置いて

「あたし仕事戻るわ。じゃあ」

もうこの部屋から出ようとしたのに

「え、きゃっ！」

小会議室の扉の前で藤堂に抱き締められてしまった。今回はこいつうミスしないよう警戒してたのに最後の最後で油断した。

「何してんのよっ！離して！」

こいつの胸をボコボコ殴つて暴れたらあたしの手首を掴んで壁に貼りつけられた。

「いい加減にしろ！離せつて言つてんのが分かんないのか！？」

思わず暴言吐き、自由な足のヒールでひどいけど藤堂の急所を蹴ろう、と足を上げた時

『ドンツ！！！！！！！！！！』  
けたたましい音が隣りからして藤堂と2人で思わず扉の方を見ると開いたドアの前に

「せ、先生・・・！」

ドアの前に立っているのは先生だった。こんなところは絶対見られなくなかったのに口から彼を呼ぶ言葉が溢れてしまった。

先生は一度あたしをちらつと見て

『ボコツ！！！！』

無言で藤堂に殴りかかった。先生のパンチが結構効いたみたいでよろけた藤堂に先生が今度は蹴り。完全に倒れた奴に先生は上から何度も踏み潰す。

先生の背中から見たことのないくらいの殺気が出ているのが分かった。けど、何が起きているのか頭がつかずあたしの体が動かない。

その時

「なにしてんだよ兄さん！！！」

と突然またもう一人入ってきた先生並みの大男が藤堂を踏み潰す先生を後ろから羽交い締めにした。

「離せよ孝二！！！！こいつが今藍に何してたと思うか！？？」

「分かってる！でもここに近づく社員は少ないけど、一応社内だから！それにこの社員本当に死ぬ！」

必死で先生を説得する突如現れた男によってやっと先生は藤堂に暴力を振るうのをやめた。

「宗方専務！大丈夫ですか！？？」

次に扉から声がしたのは美穂だった。

「仙崎くん、大丈夫だ。それより水川さんを。」

美穂は倒れた藤堂と羽交い締めする男、先生しか目に入ってなかったみたいであたしにようやく気付き、

「藍！大丈夫！？」

と美穂があたしに駆け寄ってきて

「・・・あ、うん。ちよつと驚いただけよ。それより藤堂が・・・」  
横たわる奴を見ると微動だにしない。心配になって駆け寄ろうとすれば、いつの間にか男から解放された先生に腕を引っ張られる。視線を合わせれば冷たくて、何を考えているのか分からない。

「あ・・・あ、の」

別人のような先生に見つめられて言葉が出ない。姿形はいつもと変わらないのに。

「孝二。原稿はお前に渡すから今日は藍を連れて帰る。その男ちゃんと処分しねえと承知しないからな。」

孝二、と呼んだ男の方を見ずにあたしをこの部屋から連れだそうとした。

「・・・まあよく考えるよ。それとあんまり水川さんを苛めないでくれ。うちのホープで俺の彼女の友人なんだから。」

ん？  
やっと思考回路が動き出して今までこの室内で飛び交った言葉を思い出した。

先生を止めた孝二と呼ばれた男は、確か美穂が入ってきたとき専務って呼んでた。しかも今あたしのことを彼女の友人って・・・。そして先生のことは兄さんって。

え、じゃあもしかしてここに来た知らない男は美穂の彼でうちの専務。しかも先生の弟さんなの！？

部屋の外へ無理矢理先生に出される時、藤堂の処分がどうとか言っ

ていたのを聞いて

「専務！今回のことは個人的なトラブルです！！あたしは怪我もないですし、彼は有能な記者ですからどうか処分はなしでお願いします！！！」

大きな声をあげて廊下へ出ても専務にお願いした。

エレベータに乗り、仕事のことを思い出して

「あ！仕事が……」

「あいつがどうにかするから安心しろ。」

あいつっていうのはやっぱりさっきの専務なのか。

「あの……あの、あたし！」

勇気を振り絞って声をあげたのにあたしの方も見ず、手を挙げて

「暫く話しかけるな。」

やっぱり目も合わせてくれないくらい怒っているのか。いや、怒りを通り越して呆れているのかもしれない。

ここのところ顔もろくに合わせず擦れ違いばかりだったし、このままあたし捨てられるのかな？そう思うと自然と涙が込み上げてくる。あたしの方なんか見てくれないだろうけど、先生にはれないように涙を拭いた。

会社の前でタクシーに乗り、どこへ行くんだろつと考えると自宅に着いていた。

先生が黙って鍵を開け、無言で中へ入れと促される。

靴を脱ぐ前に先生が家の廊下へ自分の鞆を捨て黙ってジャケットも脱ぎ始めた。

先生は目を瞑っていて無言。あたしはどうすればいいのかも分からず立ち尽くしているとネクタイを抜き取り、脛を上げあたしを見下ろすと

「最近様子が変わったのは仕事のせいじゃなくてあの男が原因だったのか。」

冷たい目。

怖いつて本能的に感じた。

「でもあれは事故ってどうか」

「はっ！悪いけど今俺何するか分かんないから。」

恐怖で廊下に尻餅ついて靴のまま逃げようとするれば簡単に捕まって「だから逃がすわけないだろ。今日は優しくなんてしてやんないからな。」

先生のジャケットの上に押し倒され、ネクタイで両腕を縛り上げられた。

力の限り動こうとするとあたしを見下ろす先生が

「覚悟しろ」

その声を聞いてこれからあたしは殴られるのかなと思った。

でもそれでも構わないって思ってしまった。

それで先生が許してくれるなら。

あなたのそばにいられるなら。

## 修羅場（後書き）

最後シリアスすぎみになってしまいました。ちゃんと最後は…！  
次の話との間はムーンライトノベルズの方に掲載します。R18に  
なると思いますので嫌悪感を抱く方は避けてください。読まなくて  
もわかるようにします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7072r/>

---

my love your heart

2011年5月8日20時25分発行